
耳をすませば～青い鳥が運んだ想い～

イヌズキノネコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

1・小さな世界より（前書き）

本作品は、原作者である柊あおいさんの描いた世界とは別の世界を描いています。そのため共通する登場人物もバロンだけで、その他のキャラクターはすべてオリジナルです。

小説初心者ですので、読まれる方には色々とご迷惑をお掛けするかも知れません。何か不都合な点もある場合には、いろいろなご意見を頂けたらと思います。

1・小さな世界より

森の歌声に、耳を傾けよう。

空に瞬く光から願いを聞き取ろう。

そうすれば、見えないものが見えてくる。

風が運んでくる海の想い、森の想い、人々の想い 各々の想いが僕の身体を通り抜ける時、脳裏に遠くの景色が広がっていく。

この街に育ち、外の世界を知らない僕。体の自由が制限されてしまった生活の中で、僕が知ることのできる世界はこの部屋と、この部屋から覗き見ることができる。見たことのないものは想像の中でのみ存在する。

以前、ファルスが大きな湖について話をしてくれたことがあった。

湖とは、雨の日にできる水たまりが大きくなつたものらしい。それよりも大きい水たまり。みんなはそれを海と呼ぶ。海には船とう乗り物が浮かび、船には何百という人を乗せる事が出来るという。僕の想像では海の大きさを測ることができそうにない。少しだけ残念な気持ちになつた。

ファルスはその船に乗り、ハルバニアという街を訪れた。

ハルバニアは商業の盛んな街で、中心にある時計塔がシンボルとなつてゐる。時計塔の頂上には黄金に輝く鐘があり、街の人は時刻を知らせる鐘の音を頼りに生活をしてゐるそうだ。時計塔から3方向に大きな道が伸びていて、上から見るとちょうどY字になつてゐる。3つの通りはそれぞれ、山の産物を扱つた商業地帯・海の産物を扱つた商業地帯・工芸品を扱つた商業地帯に分かれている。大通

りから枝状にのびる小道にも露店が店を連ねており、そこには普通の暮らしではお目にかかることのない特殊な物が売られているらしい。

ハルバニアで用事を済ませたファルスは行きと同じく、帰りも船を利用した。船に乗り込んだとき、空を覆う雲は泣き顔を見せていた。

船が進むにつれて、雲が涙を流し始める。

時間が経つにつれて、空から落ちてくる音は激しくなる。

音が激しさを増すにつれて、海は身体を大きくうねらせて船を揺らす。

大きな音に海が怒っているらしい。

怒った海は、山にも見える水の塊を作り出す。波と呼ばれる塊を船は斜めになりながら滑っていく。一つ間違えれば、船は波につぶされてしまう。

大きく揺れる船内。ファルスは船内の柱にしがみつく以外何もできなかつたらしい。

轟音と大きな揺れの中で、時間が早く過ぎる事を願っていたとう。

音が静かになる頃、先ほど怒っていた海はいつもの静けさを取り戻していた。目の前には終点が見えていた。

ファルスは海の話とハルバニアで買ってきました変わった目を持つ人形を、お土産として僕にくれた。海の偉大さを教えようと思い話をしたみたいだが、残念なことに……僕は偉大さを感じることなく、巨大な恐怖の対象として海が頭の中には存在していた。

ランプに照らされた机の上に、一枚の紙と筆を握った僕の右手が映る。

「あなたにとっての海はどのような存在ですか？」

問いかける言葉を、筆は文字へと変換していった。

2・風の便り

窓から太陽の光が差し込んでくる。目を閉じているにも関わらず光は強く輝いていて、まるで針が瞼に刺さっているような感じがした。

頭の中にいる住人がゆっくりと動き始める。ぼやけた視界の中で、意識が徐々に目を覚まし始めた。

「アリス、もうそろそろ起きてきて。」飯の準備手伝つてちょうどいい

寝ぼけたままの私は耳に入ってきた言葉をそのまま受け流し、もう一度ベッドに倒れこんだ。

「聞いてるの？ アリス、起きなさい」

階段を上る音が近づいてくる。音は一定のリズムで打ち出されてい。その音が止むと、次はドアを開くノブの音が聞こえてきた。

「アリス、起きなさい」

揺すられている体と聞こえてくる声。薄らと開けた瞼の向こうに、母のあきれた顔があつた。

トン、トン、トン、トン

リズミカルな朝の音。母は山菜を一口サイズに切り分けている。その横にいる私は、机の角で卵を叩いていた。殻が割れる感触で行動を切り替え、割れた場所から中身を取り出す。

「卵とハムを火にかけて、お皿に乗せておいてちょうどいい

「はい」

まだ寝ていたいと訴える欲求を抑えながら、私は料理を続けた。

火にかけていたフライパンに、ハムと卵を置いていく。卵とハム

が音を立てながら香ばしい匂いを漂わせてくる　　お腹からの訴え
が、寝たい訴えを押さえつけた。

白くなつていく卵と小麦色の肌を見せだすハム。黄色い田玉が徐々に輝きを失つていった。

焼いたハムと卵を皿に盛り付けて、リビングにあるテーブルへと運んだ。テーブルには山菜のサラダとパンの入つたバスケット、私の作ったハムエッグが並べられている。コップにミルクを注ぐと、本日の朝ごはんがすべて出そろつた。

において誘われるよう、父がよろけながら部屋に入つてくれる。

「アリス、ヤツクルを起こしてきて」

母の声を背に受けて、私は部屋を出た。

階段を上がり、廊下の途中にある右手側のドアを開けた。

「ヤツクル、起きなさい。」飯できてるよ

ドアの向こうに広がる弟の部屋。部屋は意外にもキレイに整頓されていた。

部屋の右側に机が置かれ、その机にはいくつかの本が並んでいる。机の前には窓があり、外からの光が机上を照らしていた。左側にはベッドが置かれて、ベッドの脇に目覚まし時計が横たわっている。私の部屋とは配置が逆だが、それ以外はほとんど同じような部屋である。

ベッドで身をよじりながら、ヤツクルは眠り続けている。起きそうにない弟に私は背中をドンと叩いてやつた。

「何するんだよー」

「起きなさい。」飯冷めちゃうじゃない

「うう……わかったよ

その言葉を聞いて、私は部屋を出た。

部屋を出たといひでもう一度確認。ドアを開いて中の様子をつかがつた。

「…………」

ベッドで動かない様子の弟。

やつぱり……。

私はわざりよつ強めに背中を叩いた。

朝食を済ませた後、父は仕事場となる役所へ、母はパン屋へそれ出かけて行つた。仕事で日中いない両親に代わつて、ヤツクルの面倒は私が見ることになる。

私は今年で16、ヤツクルは14。

やんちゃな時期のヤツクルは近所でも有名な悪坊主で、私の仕事はその後始末がほとんどだ。『アリスちゃんも大変ね。ヤツクル君の面倒ちゃんと見てあげるのよ』なんて近所のおばさんにつも同情の眼を向けられている。損な役回りだが、私にとつて重要な仕事である。

正午に差し掛かった時、家のチャイムが鳴つた。

家の前には、深緑色の制服に身を包んだ青年が一人立つている。

「アリスさん宛てに手紙が届いています」

青年は白い封筒を差し出して、にっこりと笑みを浮かべていた。

封筒を受け取り、軽く挨拶をした後、去つていくうしろ姿を見送った。

私は青年から受け取った手紙を持って、自分の部屋へと走つて戻つた。机に座つて封を切る。封筒の中から一枚の紙を取り出す。折りたたまれた紙を広げると、見慣れた文字がそこに並んでいた。

アリスさんへ

お元気ですか？ 最近暑さが増したようで体を崩されたりしていませんか？

僕はいつもと変わらず元気しています。

最近、絵を描くようになりました。やり始めたばかりで、まだ上手には描けません。

今練習中です。

現在猫をモチーフにして絵を描いています。ドレスを身にまとった猫の人形です。

上手になつたら見せたいと思います。

アリスさんは何かやつてある事がありますか？ もしよければ教えてください。

メイフォルトより

3・顔を隠した男

つい先日から、この街に奇妙な事が起ころっている。

3日前の深夜のことだ。

寝静まった街に、一つの足音がする。足音の中には、カツン、カツンと別の音も混じっている。

こんな夜中に出歩いているのは誰？

興味から音のする方をじっと観察した。

光の届かない、建物に囲まれた路地。姿は闇に包まれている。目を凝らしてよく見ると、薄らとだが左手にステッキが握られているようだ。身につけている服は 貴族のお召し物？

「こんな夜中に人が歩いていることはほとんどない。まして、貴族のような方が一人で歩いているのは不自然だ。私の好奇心がさらに強くなつた。

いつたいどんな人なんだろう？

私は正体を知りたくなつた。

貴族はこつちに向かってゆっくり歩いてくる。私は窓から身を投

げ出すようにして、できるだけ貴族に近づいた。

頭にはシルクハットのような物を深くかぶっている。服は、やはりタキシードだった。男の顔は

「……」

暗い闇のせいでほとんどわからなかつた。

だからといって諦めるわけにはいかない。私は、じつと観察を続けた。

貴族はこつちへ近づいてくる、ゆづくづく……ゆづくづく……と。観察する目にも力が入る。

絶対顔を見てやる！

窓枠に置かれた手が痺れるくらい、身体はギリギリまで外に投げ出されていた。

家の下までもう少し

その時、状況が変化した。

雲に隠れた月が顔をのぞかせていく。街が月の光に包まれていく。先ほどまで真っ暗だった路地にも月明かりが差し込んできた。

暗闇を照らす光が、彼の体をとらえた。

……隠された顔。そこに白い包帯が巻かれていた。

この不審者は、今まで4人の人に目撃されている。深夜の目撃証言であるため、曖昧なところが多く信憑性に欠けるところがある。

杖を持っていたとか、持っていないかったとか。タキシードを着ていたとか、マントを羽織っていたとか……。

そこで、その真意を確かめようとする子供たちが夜中街を徘徊するという騒動を起こしてしまった。昨夜のことだ。

まだ事件は起きていらないものの、不審人物であることに変わりはない。そんな者を子供たちと遭遇させるわけにはいかないと思った。大人たちは、“夜10時以降の外出禁止”を街の規則として定めた。言わなくていいことだが、騒動を起こした主犯はヤツクルである。

「姉ちゃん、どうしておれだけ一日中家の中で過ごさないといけないんだよ！」

「だって一度外に出したらどこ行くかわからないじゃない。夜に帰つてくる保証もないし……。だから今日は一日外出禁止！ 昨日の今日でまた問題起こされたら、お父さん今度は泣いちゃうよ」

街の役所に勤務する父は、規則に厳しい人だ。威厳があり、律義な性格をしている事から街の人から頼られる存在となっている。子供の頃は今のヤツクルと同じように悪さをしていたらしいが、大人になつて変わつたらしい。『あのボルトン君が……信じられないよ』なんて、隣のクルミおばあちゃんが話していた。でも、最近はヤツクルの悪さで評判も落ちてきている。『やっぱり親子だね』そんな言葉がよく耳に入つてくる。

「そういうわけだから、今日くらいおとなしくしてなさい」

そういうと、ヤツクルはしぶしぶ部屋に引き返して行つた。

昼食を済ませた午後の時間。

私は庭で洗濯物の取り込みを行つてゐる。

雲ひとつない空の下で大きめのシャツが優雅にはためき、太陽の匂いが衣類からこぼれる。色とりどりの衣が風を受けて、家族仲良く宙を羽ばたいている。

暖かな日差しが心地よい午後の時間。私の一番好きな時間である。昼を過ぎたこの時間帯は、近所を歩く人の足も止まつてゐる。私はひとりが太陽の下で佇んでいる、そんな雰囲気が好きなんだろう。目を閉じれば、身体を通り抜ける風を感じる。鳥の声が風に乗つて、私の耳に運ばれてくる。全身を照らす日の光が体の中まで温めていき、ポカポカした感じがまた心地良い。

胸の内で静かに、心が鼓動を繰り返してゐた。

「こんにちは、お嬢さん」

突然の訪問者に、ゆっくりとした時間は終わりを告げた。夢心地の私は、現実へと呼び戻される。振り返ると、白色のジャケットに身を包んだ男の人立つていた。

「驚かせてしまつたみたいで申し訳ない。ちょっとお聞きしたい事があるのだが」

私は固まつてゐた。

その男の服装は、どこかの貴族みたいで凜々しさを感じさせてい。る。革の手袋で握られたステッキも、きっと高級なものなんだろう。太陽の光をシルクハットで防ぎながらも、防ぎきれない光を受けた白のジャケットは眩しく輝いていた。前に一度だけそういう服装をした人と会つたことがある。母はそういう人を紳士と呼ぶ事を教えてくれた。

まさしく、その紳士の姿が目の前にはあつた。しかし、ひとつの

事がその姿を不自然にしている。シルクハットの下、日陰を作っている場所を白い布が覆っているのだ。

「昔、この近くにマルス・ファーレットという工芸品を扱つたお店があつたと思うのだが、知らないかい？」

問いかける言葉は耳に入つてこない。

間違いない。目の前にいるその人こそ、最近噂になつてゐる人物だ。目撃情報と一致する。

困惑したまま、その場で私は固まつてしまつた。

「お嬢さん？」

透きとおる声が頭の中に響いて、止まつていった時間が動き始めた。「あつ、すみません。ぼーとしてたみたいで……。あの～どんな話でしたつけ？」

「失礼。突然訪ねられては戸惑つてしまつのも無理はない。話といふのは、この近くにマルス・ファーレットといつお店があつたと思うのだが……お嬢さんは知らないかい？」

「マルス・ファーレット？」

聞き覚えのない名前だった。少なくとも私が生きてきた時間の中では存在しない。

「昔、この辺りで工芸品を扱つていたお店なのだが……知らないのであれば、仕方がない。ありがとう、お嬢さん」

そういうと、彼は一礼をして私の視界から消えていった。

白昼の中での不思議な出会い。“マルス・ファーレット”といつ言葉が耳に残つた。

あの日の出来事は、誰にも話していない。あの日、彼に出会ったのは私一人らしい。あんなに目立つ格好をしていたのに……、夜ではなく昼という誰もが起きている時間にもかかわらず……。今ではあの出来事が夢なのでは？ と考えている。

一応父にマルス・ファー・レットというお店がこの街にあつたかどうかを聞いてみた。父も知らないらしく、街のことについて書かれている文献を調べてみると言つてくれた。

そして、あの出来事から2カ月が経とうとしていた

その後、不審者を目撃した者は出でていない。今では不審者に関する噂も消え、みんながいつもの生活に戻っている。わたしもあの出来事を忘れていた。いや……完全に忘れて去っていた。なぜなら今私には、そんな事よりもっと重大な出来事が起きていたから。

ジリリリイ……

家のチャイムが鳴る。

私は駆け足で、玄関に赴いた。玄関先には青年が一人、手には白い封筒が握られていた。

「アリスさん宛てです」

私は封筒を受け取ると、すぐさま自分の部屋へと駆け込んだ。

部屋に入ると椅子に腰かけることなく、封筒を開け始めた。はやる気持ちを抑えつつ、封を切つていいく。中から取り出された手紙。そこにはいつもの文字とは違う文字が並んでいた。

アリス様へ

初めてお手紙を差し上げます。私はメイフォルト様に使えるヴァン
ステイという者です。

先月よりメイフォルト様が体調を崩され、今回私が手紙を書くこと
になりました。

現在メイフォルト様はベッドの上で生活を送られております。ア
リス様に返事が遅くなつたことを悔やんでおられます。

その事をどうかお許しいただきたいと思います。

また、手紙をやり取りすることが困難な状況であるため、しばらく
の間連絡を絶たせていただきます。

身勝手なことで申し訳ありませんが、承諾していただきたく思いま
す。

最後にメイフォルト様からアリス様への伝言です。

“僕は大丈夫です。”

ヴァンステイより

2カ月前の手紙からメイフォルトとの連絡が途絶えていた。今ま
では長くても2週間以内に返事を返してくれていたのに……。彼か
らの返事をこれほど待ち遠しく思つたことはなかつた。

最近はその事ばかりを考えていて、気がつくと玄関先を見つめて
いた。いつ届くかわからない手紙を待つて、期待と不安が渦巻く中
で生活を送つてきた。

そして、今日手紙が届けられた。届いた手紙は、ヴァンステイと
いう者からのモノ。彼はベッドの上から動くことができないという
内容のモノ。

私を何かが黒く染めていった。悪い予感が頭の中いっぱいに広がった。

この前の元気な姿はどうに……。

彼がくれた“大丈夫です”の言葉が、私をより一層不安にさせていた。

5・始まりのとき

彼との関係は、とある偶然から生まれた。
私が14歳の時だつた。

私の家から30分ほど歩いたところに、数隻の船が止まつている波止場がある。その頃の私は、近所に住むメアリ・カルロス・マルダ・弟のヤツクル達とこの場所へいつも遊びに出かけていた。日中の波止場は人の寄り付かない大きな空き地となるため、私たちには都合のよい場所だつた。

「みんな持つてきたか？」

カルロスが問いかけてくる。私とヤツクルは両手に持つた板を見せた。メアリは針金を10巻き程抱えている。カルロスは、各々が抱えている荷物を確認した。

「よし！ では早速作業に取り掛かろうぜ」

「あの～ マルダがいなーけど、今日は来ないの？」

メアリの大きくクリクリとした瞳が、カルロスに疑問を投げかける。

「あいつ今日はちょっと用事あるみたいだからさ、遅れるんだって。その代りみんなが喜ぶもの用意してくるつてさ」

カルロスはいつもの調子で答えた。

私たちは今イカダ作りの真最中。“この夏みんなで旅に出よう”という事からこの作業が始まった。カルロスとマルダが『海には口マンがある。絶対楽しい』なんて言うものだから、ヤツクルは乗り気になり、それにつられるよう私とメアリも参加した。カルロスが読んだ小説からの発想だそうだ。

今は先の事なんて考えず、イカダ作りがメインとなってしまっているわけだけど。

「アリス、ちょっと板を支えてくれ」

「今手が離せないから、ヤツクルに言つて」

「ヤツク、こつち手伝つてくれ」

カルロスは手招きをしながらヤツクルを呼んだ。ヤツクルが板を押さえ、カルロスは釘で板をイカダに張り付けていく。カルロスの太い腕と大きな体格が、如何にもこの作業に合つていて。私とメアリは、針金を伸ばしてイカダの土台である丸太1つ1つが離れないよう補強を施す。地味な作業だけど、意外なほど重労働である。

1時間が過ぎる頃、作業に熱が入つている私たちは額に汗を浮かべていた。拭えど拭えど、垂れてくる汗に、少しづつ集中が切れかかっていた。

「遅くなつてごめん。そのかわり土産もつてきたからみんなで食べようぜ」

突然割り込んできた声に、体が反応する。声のする方に目を向けると、一人の少年が手を振つていた。

ウェーブした茶色い髪、シャープな顔立ち。カルロスのようにボツチャリ体質ではなく、ガツシリとした筋肉質の体。やつてきたのはマルダだつた。

マルダの左手には、パンが詰め込まれた袋と飲み物が掲げられている。マルダの実家はパン屋を営んでいて、今日はその手伝いをさ

せられていたらしい。それで、余つたパンをこつそり持ち出してきたとか。

マルダが来たところで作業を中断し、私たちは休憩に入った。

「さすが……。お前の家のパン、うまい！」

頬を膨らませて、カルロスが感想を漏らす。

「当たり前だろ。まずいなんて言つた今度から食わせないからな」

「でも本当においしい。マルダが作つたものもあるの？」

「まあ、一応修行中だから。アリスは料理とかしないのか？」

「マルダ、ダメだよ。お姉ちゃんに料理なんてされたら……」

「ヤツクル 何か言つた？」

パンを頬張つたまま、ヤツクルを追いかける。必死に逃げるヤツクル、追う私。それを見て、カルロスとマルダは笑っていた。

そんな中で、メアリはひとり黙々と食事をつづけている。

メアリはお金持ちの家のお嬢様で、家の中ではマナーにこだわって言われてきたらしい。食事中に騒ぐのはもちろん会話をえしない。私たちと会うまでは、家から出る事もほとんどなかつたようだ。ある日、窓からぞびしそうに顔を出す少女を見て、カルロスが強引にでも連れ出そうと考えなかつたら、ここにメアリはいなかつたかもしれない。

今は少しづつ私たちとの付き合いに慣れてきている。

みんなが食事を終えると、談話の時間に入った。将来の夢やこれからのことについて冗談を交えながら話をした。

「やつぱりマルダはパン職人かあ。カルロスは？ おじさんの後を継いだりするのか？」

「いいや。大工の仕事も楽しそうだけど、ほかにも仕事つていろい

ろあるだろう？だから、今はまだ考え中。そういうヤツクは何になるんだ？」

「おれは……医者とか？」

「おまえが医者！怖いな。薬を飲むのにも命がけになりそうだ」「安心しろよ。バカが治る薬作つてやるから」

ムスッとした顔をするヤツクル。怒った顔のカルロス。その周りで満面の笑みを見せている私たち。人気のない波止場に笑い声がこだました。

笑いながら私は“男の子にはいろいろ夢があつていいな”と思つた。

女の子には結婚するくらいしか夢がない。母のように近所の手伝いとして働くことはあっても、女人人が仕事をしているなんて聞いた事がなかつた。

「アリス、おまえは何かないのか？ 警官とか想像できるんだけど」「ううん。私もまだ考え中」

本当は好きな人と結婚する事とは言えなかつた。

夢と言えば夢になるが、これは女の子にとつて唯一の選択肢なのだ。だから今話している夢とは別のものだし、この場で言うのは不釣り合いだと思った。それに結婚なんて、実際に待ち受ける未来の話をしたくなかったからである。

「メアリは？」

カルロスは間髪をいれずに訊ねた。

「私はね、学者にならうと思つの」

「えっ！」

私は驚いた。

「学者といつても考古学者。昔の出来事や文化を調べるの。600年前の出来事について、まだはつきりとした内容がわかつてなかつたりするから、それを調べてみたいと思つてる。知らないことを発

見するつて楽しそうだし……だから、今はそのための勉強として昔の資料や文献なんかを

「

みんなも驚いていた。女の子なのに学者になるなんて　はじめはそれだけの驚きだつた。けど、聞いて行くうちにその言葉が冗談じやない事がわかつてきた。はつきりとした意思を持つて、将来を考えている。メアリ以外は誰一人としてそういう事を考えたことはなかつた。今はまだ子供であることを満喫する、そのことしか考えていなかつた。この話だつて冗談交じりのものだつたはず……。そんな中でメアリの口にした言葉は、私たちに強い衝撃を与えた。“私たちはまだまだガキなんだ”つて思い知らされた気がした。それと同時に、メアリが急に大人びて見えた。

「俺たちも努力しなくちゃな」

マルダの言葉に、私たちは深くうなづいた。

夕日が海に沈むころ、みんなで帰り道を歩いていた。炎天下の中で作業をしたせいか、白い肌のメアリは赤みを帯びていて

……最近すこし焼けてきているかも。

帰り道は、イカダがあと3日もすれば完成するといつことともあってどこを旅するかの話で盛り上がつていた。話を聞きつつも、私は昼間の出来事を思い出していた。

自分の夢　今まで結婚だけしか考えていなかつた。

……いや、結婚しないと縛つていた。

本当は何をしたいのだろう？

初めて自分を見つめていた。

途中の道でみんなと別れ、私とヤックルの一人だけになつた。さつきまでの賑やかさが嘘のように、今はシーンとしている。玄関をぐぐりドアを開けようとした時、苦しそうな鳴き声が聞こえてきた。

クックルウ……

静けさの中に響き渡る声は、庭の方から聞こえてくる。レンガを積み重ねた家の壁、声はその壁の方からしている。壁と地面が交わるところ、暗くてよく見えないが、必死にもがいている物体がいた。それは、羽を必死に羽ばたかせている鳥だった。何かの拍子で壁に激突し、おそらく空を飛ぶことが出来なくなつたのだろう。

私はもがく鳥を両手でそつと救い上げた。

家に入り、私は母から手当ができる物を借りた。

鳥の羽からは薄らと赤いものが流れていたので、まずその部分に消毒液を当てた。あはれる鳥を抑えながら、次にその部分に包帯を巻いていく。

青い羽根と黄色い嘴。鮮やかな色合いをした綺麗な鳥。

私は美しい鳥に目を奪われていた。……だから、手当を済ませるまで気がつかなかつた。鳥の足に巻きつけられている何かに。

私はその何かを足からそつとはずす。くるくると巻いてあるそれを広げると、そこには字が書かれていた。

この手紙を読んでくれる誰かがいることを願います。

はじめまして、私はメイフォルトといいます。

このような手紙に驚かれていると思います。

私は今まで鳥かごの中でしか生活してきませんでした。そのため外の世界を知りません。

外の世界について知りたいという好奇心からこの手紙を書きました。

これを読んだ誰か、私に外の事を教えてくれませんか？

返事を待っています。

メイフォルトより

エルハーバン1番街14-2

内容を理解するのに、少し時間がかかった。

はじめは誰かのイタズラだらうと思った。次にこの鳥がメイフォルトというのか、と考えた。しかし住所が書いてあることからイタズラでもなれば、この鳥がメイフォルトというのではないことがわかった。いや、イタズラかどうかはまだはっきりとしないが……。ただ文通相手を見つけるために、このような事をしたことだけはわかつた。

けれどもいくつか疑問が残っている。

鳥かごでの生活？ 外の世界？

意味することが私にはまだわからなかつた。

「どうしようか……」

顔の見えない不思議な相手からの手紙。私はどうすべきか悩みながら、机に頬杖をついていた。

翌日、私は手紙を書いていた。昨日届いた手紙の返事である。いろいろと悩み考えてみたが、ひとまず返事だけでも出すことにした。

昨日のメアリの話が、決定打となつた。

私は何をしたいのだろうと自分について考えた。しかし、何も知らない私では答えなど出せるはずもない。……私はこの手紙の相手と同じように外の世界を知らないのだ。だったら、これは外の世界を知るいい機会なのかもしれない。私とは別の土地で暮らす誰かを知ることは、外の世界を知ることになるのだから。

そういう気持ちから、手紙を書く事に至つた。

マイフォルトさんへ

はじめまして。お手紙読ませてもらいました。

私はアリスといいます。あなたの住んでいる街から海を隔てたところにハルバニアという大きな街がありますが、そこから少し離れたレアドールという街に住んでいます。

私も外の世界についてほとんど知りません。あなたの役に立てるかわかりませんが、あなたと力になりたいと思っています。

私の知らないことをあなたが知っているのであれば、私に教えてください。

アリスより

レアドール3番街1-13

初めて書いた手紙。返事をくれるかどうか不安だった。もしイタ

ズラだつたら……という不安もあつた。

数日後、手紙が届いた。もちろんメイフォルトからの手紙だった。

6・幸せな時間

その後も手紙が来れば返事を書き、また手紙が来れば返事を書いた。その繰り返しをやり続けて、気が付いた時にはメイフォルトと文通を行うようになつていった。

文通の中で、彼についていろいろなことを知つていった。メイフォルトは男の子で私と同じ年であること、どうやら高貴な家柄の子であること。誠実な性格で、負けず嫌いであること。髪は短めで、私と同じブラウン色をしている事。

それから“鳥かごでの生活”、“外の世界”的意味。

彼は幼いころから体が弱く、外に出る事ができないらしい。病気になりやすくベッドの上が彼の生活の場となつていて。彼の世界は一つの部屋の中だけ　　それは鳥かごのようなモノ。だから家の外に広がる世界の事を知らない……。

はじめの手紙に比喩的な表現をしたのは、同情から文通相手になつてもらいたくなかったからだという。あんな奇怪な表現されたら、読んだ相手は悪戯と考えてそのまま処分してしまいそうだが……。

彼について他にもわかつたことがたくさんある。

彼は自分の体を不自由などと考へたことは一度もない。与えられた状況をいかに生きようかと考へている。もとから縛られた人生だけど、その中でも出来ることはたくさんあると言つていた。私はその逆だった。自由が与えられた人生を自ら縛ろうとしていた。

彼との出会いは、私の人生に幅を与えてくれた。

私に手紙を運んできた鳥は怪我を完治させた。今では元気に空を

飛びまわっている。朝空へ飛び立ち、夜になると私の窓をくちばしで叩く。この鳥にとって私の部屋は戻つてくる家となっていた。

懐いてしまったこの鳥に私はメイと名付けた。もちろんメイフォルトからとつてつけた名前である。メイフォルトがこの鳥のようこそ空へ羽ばたけるようにという願いを込めて。

彼に手紙を書くときは、必ずメイに相談する。どんな話をしようか？ こういう話は面白い？ なんて。メイはいつも私の言葉を頷きながら、すべての話を聞いてくれた。

彼との文通が始まって、約1年が過ぎ去った。手紙を通して、私は何でも話せる仲になっていた。

去年は外で遊びまわっていた私も家事を手伝うようになり、今では遊びに出ることも少ない。そういえばカルロスやマルダと最近会つていらない。あの日のメンバーで遊ばなくなつたのはいつからだろう。マルダが本格的にパン職人の修行を始めた頃？　メアリのお父さんから雷を落とされた時？　それとも……カルロスが豚になつた時？

……最近カルロスは太りだした。成長期のせいだろうか？　もともとポッチャリとしていたが、決して太っているなんて思ったことはなかつた。それが見る見るうちにポッチャリとは呼べなくなつてしまつた。太つた体型では、前みたいにいろいろな事が出来なくなつた。太りに太つた体はついに部屋から出る事ができなくなつてしまつた。

まつた。

通称：カルロス豚事件。

.....。

といふのは嘘で、実際の話はこうである。

最近この街にきた家族がペットを飼っていた。ペットというのは小柄な豚で、カルロスと呼ばれていた。それを知った私たちは、カルロスの事を“豚”と呼ぶようになった。カルロスはちょっと怒つたように演じつつも、別に気にしていない様子だつた。

.....だが、被害はこれだけにとどまらなかつた。私たちがカルロスを豚と呼ぶのを聞いていた近所の人達もまた、カルロスを“豚ちやん”と呼ぶようになった。そして、ペットの豚を“カルロスちゃん”と呼ぶようになつたのだ。さすがにカルロスも、これは我慢できなかつたようだ。

ある日、カルロスは豚に挑戦状をたたきつけた。決闘でどちらがカルロスにふさわしいか決めるつもりらしい。決闘前になんとか食い止める事ができたが、あまりにバカバカしいこの事件は街中の噂となつた。これが、カルロス豚事件である。

久々の珍事件をメイフォルトに話したら、彼は大爆笑したようだつた。そして“君には素敵な友達がいるんだね”と、羨ましそうな一面も見せてくれた。

手紙だけのやり取りでつながつた私たち。
手紙の中でわかっていく彼の姿。

会つてみたいと思つ気持ちを抑え、筆を走らせた。

「メイみたいにきっと、素敵なお手をしているんだろうね？」

私のつぶやいた言葉に、メイは小さくつづいた。

7・友の声

「ん……」

頭の中がモヤモヤしている。田の前には、ぼやけた景色が広がっている。

あれ？

さつきまで私は手紙を書いていた。メイと相談しながら、どんな事を書くのか決めていた。だけど、書いていたはずの手紙が……見当たらない。あるのはメイフォルトからの手紙だけ。

「クルックウ……」

視界を横にずらすと、メイが心配そうな表情を浮かべている。

「私……」

ゆっくり頭を持ち上げる。高い視点からの景色は、私がいつも目にしている机に座った時のモノだった。どうやら机にうつ伏せになつていたらしい。だけど、どうして机にうつ伏せていたのだろう？ 書いていた手紙は？

記憶の糸を手繰り寄せる。

「そつか……」

私は思い出した。そして、今の状況を理解した。

昨日、私はメイフォルトから届いた手紙を読み返していた。ここ数日不安で眠れない日々を送っていたため、その不安を紛らわせたいと思って起こした行動だった。

手紙を開くと、そこから元気な彼の姿が浮かんでくる。他の手紙からも彼の元気な姿がうかがえて、私は手紙を開く毎に涙を流した。あの頃がどれだけ幸せだったのかを、私はその時初めて知った。ある手紙には『僕の命はいつ終りを迎えるかわかりません。だが

ら今を後悔しないように生きていきたいと思つています』と書いてあつた。彼は身体が弱体していく病気を抱えていて、それは現時点では治すことのできない不治の病だつた。それでも強く生きていることが手紙には記されていて、ヴァンステイという人が書いた手紙が偽りのモノではないのかと疑つた。

そうやつて読み返していくうちに、現実から目を背けていく自分がいて、その事に気がついた時、私の中に潜む闇がより大きな存在となつて私を襲つた。闇に襲われた私を、疲れた体が夢の中へと避難させた。

つまり、私はいつしか現実から夢の世界へと誘われて、その世界にいたようだ。先ほど手紙を書いていた私は、夢の中にいるもうひとりの私だつたらしい。あまりに幸せな夢だつたために、そんな事に気がつかなかつた。

現実に戻つてきた私は、目の前に広げられた一枚の手紙を見つめていた。それはメイフォルトの書いたモノではなく、彼の元気な姿が浮かんでくるモノでもない。病気で苦しみ、倒れている彼の姿を思い浮かばせるモノである。

私は現実を受け留め、嘆きの声を上げた。

神様はどうしてそんな事をするの？

一生懸命に生きている人にどうして試練を与えるの？

彼にはもう十分すぎる足枷が付いているのに……。

大切な人を……メイフォルトをこれ以上苦しめないで！

声を聞き入れてくれる者はなく、虚しく心に響くだけだつた。

私はまたしても不安に押しつぶされてしまった。耐えきれなくなつた私は、逃げるようの一冊の本を手にした。手にしたもののは『も

う一つの世界』というタイトルの本。前にメアリが貸してくれた本である。

本を開いて、活字の並んだ文を目で追つた。読んでいるところは102ページ。中途半端なところから読みだしたため、どういう本なのかはわからない。けど、今の私にはそれでよかつた。内容なんてどうだつてよかつた。ただ現実を少し忘れたいだけだから。

文の中では、昔の人の暮らしが書かれていた。今とほとんど変わらない暮らしのようだが、少し不便であつたようだ。まず移動手段に汽車がない。それから、医学という学問が存在しない。人間が生きていく上で必要なモノがないなんて、とんでもない世の中である。

『昔の人は、不思議な力で病気を治していたんだつて』

ふと、メアリの言葉が脳裏をよぎつた。

600年前に起こつた出来事以前、この世界には魔法があつた。現在では調べられないため、あくまで推測の話だが文献にそのような力について記されたものがあるらしい。だが今の時代にそのようなモノはない。そんな力は存在しない。だから、その代わりとなるモノが今の世界にはできた。

私は読んでいた本を閉じて、天井を見上げた。そしてゆっくり目を閉じて、心の中で一言つぶやいた。

魔法みたいに特別な力があればいいのに……。

手紙が届いて5日が経つた。眠れない日々を送っていた私は、久しぶりに朝食の手伝いをしなかつた。

朝食の時。両親と弟は心配そうに私を見ては、「もう少し休んでいなくていい?」と声をかけてきた。

私は首を横に振るばかり……。寝たくても眠れない、それに眠つたら眠つたで嫌な夢が襲いかかってくる。もう一度あの夢が見れるならいいけど、今まで幸せだと感じた夢はあの夢が最初で最後だつた。だから今は寝ることが怖い……。起きて何かをしていく方が精神的に楽だつた。

お昼過ぎ、私は洗濯物を取り込んでいた。

この前までは幸せに感じていた時間も今では好きになれないでいる。太陽は光を注いでいるのに、私には雲がかかたような天気に思える。鳥の声も聞こえない、風を感じる事もない。

私はまるで人形のようにその場所に置かれているだけだつた。

「アリス」

私を呼ぶ声が聞こえる。

「アリス、顔色が悪いけど……大丈夫?」

そこにはメアリがいた。

メアリは私の事をひどく心配してくれていた。ヤツクルや近所のおばさん達から話は伝わっていたらしい。メアリは一生懸命に話しかけてくれたけど、声は耳に届いてこなかつた。

ただ頷いているだけの会話。

それでもメアリは私に声をかけ続けてくれた。

「そのときマルダがね」

元気づけようと楽しい話をしている。人の失敗や不幸を笑い話にすることは、メアリの嫌いなことだった。けど、今メアリはそういう話をで私に笑顔を取り戻そうと一生懸命に頑張っている。

それに私は応えられず、ただ俯き続けていた。

「…………」

どのくらい時間がたつたのかはわからない。今もなおメアリの話は続けていた。自分の嫌いな事なのに、ずっと……ずっと……やり続けていた。

「…………」
「もういいよ。
心配してくれてありがとうございます。」

そう言おうと思つて、私は顔をあげた。

彼女の方を向いたとき、メアリの眼はすこし潤みを帯びていた。ちょっととずつ充血していく瞳。何かに耐えるよう、両手はこぶしを握りしめている。笑つた顔は少しひきつつていて、作られたものだとすぐにわかる。

私はメアリの姿を見て、言葉を失つた。

彼女の顔を眺めていると、頬を一滴の水が流れた。流れる水は頬を伝つて口元に行き、そのまま通り過ぎて地面へと落ちた。

「メアリ、あのね」

私の口から言葉がこぼれ出た。なぜ言葉が出てくるのかわからぬい……。ただ一度開いた口は塞がることなく、中にため込んだ思いをすべて放出した。

「そんな事が……。もつと早く気付いてあげなくちゃいけなかつたのに……。ごめん、アリス」

話を聞いた後、メアリは頭を下げた。謝らなければいけないのは、私の方なのに。

「私……友達失格だね」

「何言つてるの？ 私が一人で抱え込んでいたんだから、私が悪いの。メアリに相談もせず心配ばかりかけて……。私こそ友達失格だよ……」

「…………」

しばらく沈黙が続いた。お互いなんとなく話しかげづらくなつていた。でも時間が経つにつれて、そんなわだかまりも少しずつ消えていった。

すべてのわだかまりが消えた時、不思議と一人の顔に笑みがこぼれた。

「ごめんね」

「私の方こそ……」ごめんなさい

お互い頭を下げ合つて、長い沈黙は終わりを告げた。

「アリスにとつて、そのマイフォルト君は特別な人なんだね？」

メアリが先に口を開いた。

「私にとつてアリスやヤツクル、カルロスにマルダは特別な人……

だけど、たぶんそれ以上なんだよ きっと」

「特別？」

「そう。私もカルロスやマルダが死んじゃうかもしれないって考え

たら、同じように不安な気持ちになると思うの。……けど、今のアリスみたいになれない。自分自身をそこまで追いやる事なんてできないと思う。だからアリスにとって、メイフォルト君はとても特別な人」

私はただ頷きながら、メアリの話を聞いた。

「私は経験した事がないけど、たぶんそれって恋しているんじゃないかな？お母さんが話してくれていたんだけどね、人は恋をすると周りの事が見えなくなるって。それで、その人の事を想いすぎるあまり辛くなる時が来るって。今のアリスって、それと同じような気がする」

「恋……」

私は恋なんてしたことがなかった。確かに私にとってメイフォルトは何でも話せる存在。それだけじゃなくて、私の憧れでもある。

その気持ちがいつしか変わってしまったていたの？

……気付かなかつた。顔も知らないけど、手紙だけのつながりだけど、それでもメイフォルトの事を好きになつていたなんて。アリスと同じように彼もアリスの事を想つているかもしれない。だつて、病氣で倒れているときに、アリスの事を思つて“大丈夫”なんて言葉言えないよ。一番つらいはずの自分よりも、心配してくれるアリスの事を考えているんだから……」

メアリの言葉は、私の心にそつと染みていった。

「大切なよ、メイフォルト君の事。ならさ、こんなにじうで暗い顔なんてしていいの？アリスまで倒れちゃつたらきっと悲しむと思う。それに何もしないでいるなんてアリスらしくないよ……」

私の心から暗い闇が少しづつ消えていく。

今私はただ奇跡信じているだけの弱虫だ。何もせずに、ただ悲しんでばかり。

彼と会つ前のアリス……いやそれよりも悪い。

ただ未来を待つだけなんてイヤ。未来を変えるために何かしなくちゃ。

私は心の重りが少し軽くなるのを感じた。今まで胸にため込んでいたものが、すっと消えていく。

「さつきよりもいい顔してる。辛いだろ? けど……私は応援しているからね!」

そういうメアリは目を赤くしながらも、満面の笑みを見てくれた。

夕食を済ませて部屋に戻ると、メイが窓を叩いていた。

「『めんねメイ、いろいろ心配かけて。でも、これからは大丈夫だから』

メイは首を傾げながらも、うなずいてくれた。

私は机に向かいながら、これからどうするべきかを考えた。正直いい考えは浮かんでこない。

本当は会いに行きたい。

……けど、会つてどうすればいいの？

励ますの？ 励まして彼は喜んでくれるの？

同情されたと思つて怒つたりしない？

それに辛そうにしている彼を前にして声をかけられるの？

いろいろな考えが頭の中をよぎつていぐ。終点の見えない論理の渦を、私はひたすらもがいていた。

静まり返った部屋に、突然ノックする音が響き渡った。ゆつくりと開くドアの向こうに、父の姿があった。

「アリス、ちょっと話したい事があるんだが……いいか？」

「……うん」

父はゆつくりとした動作で私の部屋に入つてくる。父から話をしてくれるなんて久しぶりだから、ちょっと戸惑つてしまつ。父はベッドに腰をおろして、椅子に座る私に向かい合つた。

「この前おまえが話していた事なんだが……」

心当たりのない言葉。私は自分が何を話したのか必死に思い出そうと、記憶の糸を思いつきり引っ張つた。

「マルス・ファー・レット」というお店の事だ

「…………あ！」

忘れていた記憶が蘇ってきた。

2カ月前、私は父に頼み「ことをしていた。“マルス・ファー・レット”という店がこの街に存在していたかどうか、という事だつたと思つ。

「それがどうしたの？」

私は父に問い合わせた。

「いや…………調べてみたんだ。マルス・ファー・レットというお店は、確かに存在したよ。随分昔の話になる…………600年以上も前の事だ。工芸品を扱つた店は確かにその名前で存在していた」

私は驚きを隠せなかつた。

あの紳士が言つていた話は本当だつた。しかも600年以上も前に……。

「アリスは、どうしてそんな昔のお店について知りたがつているんだ？ それよりも600年以上も前に存在したお店をなぜ知つているんだ？」

私は慌てて答えた。

「そうか…………それだけならいいんだが…………」

父は険しい顔をして、言葉を濁した。

「何があるの？」

「…………いや。実はな、その店の品は普通のものと違つていたらしくてな…………特殊な力を秘めたものを扱つていたらしいんだ 魔法みたいな。もしかしたらアリスが変な事に巻き込まれているのではないか、と思つてな…………」

「そんなことないから安心して」

私は明るい顔をして、父の不安を晴らさうとした。

話を終えると、父は部屋から出て行った。部屋を出るまで、父は心配そうな顔をしていた。

父が出た後、私は一人になった部屋の中で動搖していた。

あの話が本当だったこと。そして、魔法みたいな力のこと。

よく考えてみたら、あの人の瞳は不思議な感じを持つていた。布の隙間から見えた瞳は緑色をしていて、しかも瞳から零れるように光を放っていた。胸が暖かくなるような淡い光を……。服装の不自然さも、魔法を使う者なら考えられなくない。いや、魔法を使う者なら普通に暮らす私たちとどこか違っていることは普通なのかもしれない。

紳士と魔法が結びついていく。そして、私の中で希望の光が生まれた。

未知の力だけど……

もしかしたら彼を救う事ができるかもしれない！

そう考えたら、居ても立つても居られない気持ちになつた。

もう一度あの人に会う必要がある。

私の中でやるべきことが決まった。

深夜、両親が寝静まる頃。私はそのときを今か今かと待っていた。家の電気が消えてから1時間、私は音を立てないようにして部屋

から出た。階段降りるとき、ギイ……ギイ……と板がしなりだす。できる限り音を立てないよう慎重に足を運んだ。

階段を降りて、家のドアの前まで進んできた。……まだ誰も気づいていない。

私はそつとドアを開け、外の世界へと飛び出した。

夜風が私の体を冷やす。そこで緊張が一瞬途切れた。

月明かりの淡い光に包まれた外の世界。いつも見ている街並みとは違う光景が、目の前に広がっていた。

鮮やかなレンガの建物を夜の空気が包み、華やかさをすべて消している。月光が当たる部分には、いつも赤・オレンジ・茶色といった色彩がなく、白に近い淡い色をしていた。普段汚れが目立つ場所は黒い色に塗りつぶされ、そこが汚い所だとは決して思う事はない。

夜が見せるもう一つの街の姿。私はその中へ足を踏み入れていった。

レンガを敷き詰めた道を、私の足音だけが進んでいく。目的の場所を持たない足は、道の続く限り一步を踏み出す。

私を見ているのはお月さまだけ。

月明かりのスポットライトに照らされて、私は靴で音を奏でた。

過ぎていく景色を見ながら歩く。

カルロスの家、マルダの店、メアリの屋敷、街の役所……。
気づけば、あのペットカルロスの家まで来ていた。周りは音を失つたように静まり返つていて、どうやらペットもお休みのようである。

サッと風が吹き抜ける。さっきまで明るかつた道が、暗闇に包まれた。真っ暗闇の中ひとりぼっちにさせられた私。……すこし怖くなつた。

恐怖に怯みそうな体を動かして、闇の中をまた歩き始める。

会えるかどうかなんてわからない。会えない可能性の方が高い。だって2ヵ月前の出来事で、それ以来目撃されていないのだから……。でも、今私にできる事はやつておきたかった。

心の中で“もう一度会わせて”と願いながら、私は足音を響かせた。

タン、タン、タン……

タン、タン、タン……

タタン、タタン、タタン……

「！」

突然足音が変わつた。私は足を止め、その場に立ち止つた。

タン、タン、タン……

私の他に誰かが歩いている。良く聞くと、足音の中にカツンとう音が混ざつている。

もしかして。

耳だけを頼りに、その足音へ向つて歩みだした。

暗い道の先から誰かが歩いてくる。手には棒みたいなものを持っていて、頭に何かかぶつている。立ち止つている私に、その人物はゆっくり歩み寄つてくる。

2人以外誰もいない通り。そこを夜風が通り抜ける。

次の瞬間、月が雲間から顔を出した。先程まで闇に包まれていた通りに月明かりが差し込んでくる。光は私の方からその人物の方へ、次第に範囲を広げていった。

光の中にたたずむ私。目の前には、あの人気がいた。

9・月明かりのもとで

月明かりの下、白いタキシードに身を包み、シルクハットで頭を隠す紳士の姿があった。革の手袋と革の靴、手には宝玉のついたステッキを持っている。顔を布で覆い隠し、隙間から緑色の輝く瞳が私の方へと向けられている。

探していた人。本当に会えるなんて思つていなかつたけど……。

彼は私の方へゆっくりと歩み寄ってきた。

「こんばんは、お嬢さん。またお会いしましたね」
紳士の澄んだ声が通りに響く。

「こんばんは」

私は岩のように身を固くして、さじなくお辞儀をした。

「こんな暗い道を一人で歩いているのは危険だよ」

やさしい口調で彼は微笑んだ。

「実は……あなたの事を探していたんですね」

「私の事を？ それはどういうことかな？」

「前にマルス・ファー・レットというお店を探してらしたでしょ？

そのことについてお話があつて」

「そうか……何かわかつた事があつたようだね。お話を聞きましょ

う

私は一呼吸おいて話を続けた。

「昔この土地にそのお店はありました。確かにマルス・ファー・レットという芸品を扱つお店です。今から600年以上も前の話です

が……」

「そうでしたか……」

彼は残念そうに声を漏らした。

「そのお店は“特別な力”を秘めた物を扱つていたと聞きます。あ

なたはどうしてそのお店を探しているのですか？」

一瞬、彼が驚いたように見えた。けれど、すぐさま冷静さを取り戻し、やさしい口調で言葉を返した。

「あなたはどういったお店がご存じなんだね？……わかりました。私がそのお店を探している理由について教えましょう」

そういうと、彼は真剣な表情で語り始めた。

「私はバロン。本当の名前ではないのだが、皆にはそう呼ばれる。私は自分の記憶をほとんど失つていて、残つている記憶を頼りにこの街へ来たのだ。記憶の中にある マルス・ファーレットという店を頼りにね。きっと私にとつては大切な場所だったのだろうが、まさか600年も前の事だとは思いもしなかつた……」

彼の声はどこか悲しげだった。

「お嬢さんのおっしゃる通り、マルス・ファーレットは特殊なものを扱っていた。今では考えられないだろうが、魔法を秘めたものだ。当時はそれほど珍しいことではなかつた。そこら中に魔法があつたからね。人々に愛され、暖かな人のぬくもりがそのお店にはあつた思い出の中の話だよ」

「……そうですか」

やつぱりこの人は魔法と繋がりがあつた。私の中で微かに光つていたモノが、力強く輝きを放ち始めた。

「もしも見つける事ができるのであれば、私がどういうものなのかも詳しい事がわかると思っていたのだが、残念だ……。まあ魔法自体の存在がなくなってしまったこの街を見て、だいたいの予想はしていたが……」

「あの！」

「ん？」

「あなたは……魔法が使えるのですか？」

私は率直な意見をぶつけた。

「そうだね……。魔法と呼べるかどうかわからないが、同じような力を使うことはできる。それに、私が生きていること 자체が魔法と

言えるかもしないね」

私には彼の言つた言葉の意味がわからない。

彼が生きていることが魔法とは？

「どういふことですか？」

「あはは。そういえばまだ顔を隠したままだつたね……失礼。ここまで話した事だから、お嬢さんには私の顔をお見せしよう」

彼はシルクハットを脱ぐと、顔を覆つた包帯をほどいていった。

シユルシユルと包帯は地面に落ちていく。彼の顔が少しづつ明らかになつていった。

頭からちょこんと飛び出た尖つた耳、緑色に輝く目、すっと突き出でいる鼻。鼻の横、頬の部分からは長く銀色をした髪が伸びている。口元は凜々しく、気品を感じさせる。顔全体を黄色い産毛が覆つていて、光を浴びて黄金色に輝いていた。

月明かりに照らされた顔。

それは人の顔ではなかつた。……そこには猫とよばれる動物の顔があつた。

私は思わず息をのんだ。

今まで話をしていた紳士が、まさか猫だつたとは思わなかつたら……。それと、月明かりにたたずむその姿がまるで夢の中に出でくるような神秘的な光景だつたから……。

一度だけ紳士の服装をした人に会つたことがあるが、その人よりもこの人の方が紳士らしく思えた。凜々しくて優しくて……それで

いて、力強さを感じさせる。

バロンの姿に、一瞬私の心は奪われた。

「改めまして私がバロンです、お嬢さん
帽子を右手に持ち、お辞儀をしてくる。
「私はアリスです、バロンさん」
私も頭を下げて、初対面の挨拶をした。

お互に名乗ったところで、私は話を切り出した。

「あの バロンさん！」

「私のことは、バロンとだけ呼んでくれないか。“さん”を付けられることに慣れてなくてね」

「それなら私の事もアリスと呼んでください。お嬢さんなんて、呼ばれ慣れてないから……。それで、バロン。あなたの使える魔法について聞いてもいい？」

「それは別に構わないよ」

私は一つ息を吐き出して、バロンの方を見た。

「今……私の大切な人が病氣で苦しんでいるの。でも、その病氣は珍しいモノで治療法が見つかっていない。魔法には不思議な力がある、そうでしょ？ もしかして……」

「残念だが、私の力ではそこまでの事はできないのだよ。期待を持たせたみたいで悪いね」

期待していなかつたわけではないが、それでも落胆するところがあつた。バロンのやさしい声はそんな私をなだめた。

バロンはきっとやさしい人。会つて間もないが、そういうした雰囲気を漂わせている。

私はその優しさに甘えて、言葉を続けた。

「それなら……私をあなたと一緒に連れて行つて！」

「……。それはどうしてかな？」

バロンは急に険しい顔をした。

「あなたは自分を探す旅をしているのでしょうか？ もしかするとその途中に私の見つけたいものがあるかもしれないから……」

魔法が使えるということは、その記憶には魔法についての事柄が絡んでくる可能性がある、私はそう思った。

「言つておぐがアリス、私の旅は記憶を探すことだ。決して魔法を見つける事ではないのだよ。それに　君が思つてはいる以上に、私の旅には危険が伴う」

「わかつてはいる！　でも……バロンと一緒に行けば見つかる気がするの。たぶん私ひとりじゃ何もできない……。だからあなたの力を貸してほしい！」

一步も引く気はなかつた。彼の眼から視線をそらさず、じつと見つめた。

彼の強い視線が私を襲つ。けど、目を背けるようなことはしない。逆に視線を打ち返すよつ、私は目に力を入れた。

「なるほど。どうやらあきらめる気はないようだな。……わかつた。ただし、今すぐ一緒に連れてはいけない。家族には内緒で出てきたのであるづ。何も持たずに旅に出ようとするところを見ると、ずいぶんと急な申し出みたいだな」

確かにそうだった。今日私はバロンを探していただけだつた。
「明後日の夜、迎えに来よう。その間、旅に出るかどうかもう一度よく考えてみるといい。もし行くのであれば、そのときまでに旅の準備を整いておいてくれ」

「本当に来てくれる？」

「ああ。こう見えて私は約束を破つたことがないから、安心して待つてはいるといい」

そういうとバロンは身体を翻して、夜の闇に消えていった。

翌日、私は旅の準備を始めた。

大きな荷物では邪魔になるだから、必要なものを最小限に抑え、手持ちのバッグに詰め込んでいく。衣類に食料、あと……何か

あつた時のために薬や包帯など。

荷造りは、意外と早い時間で済ませることができた。あとは、どうやって家を出るか理由を考えるだけ……。

夕日が沈む少し前の時間帯。

私はメアリと近くの喫茶店にいた。アイスティーを口に運びながら私は、メアリに旅へ出るための相談を持ちかけていた。

「旅に出るつて どうして?」

驚くメアリを他所に話を進めた。

「実は昨日ね……」

私は昨日の出来事はメアリに話した。メアリは呆気にとられた感じで、一言も口を挟まず話を聞いていた。

「それで……親にどう言えればいいのか考えてはいるんだけど、いい考えが思い浮かばなくて」

「……ごめん。あまりに現実離れした話で、つまく整理できてないんだけど」

「ううん、いいの。とりあえずは旅に出る理由を考えてほしいだけだから」

氷が入ったグラスをストローでひと搔きし、乾いた口にアイスティーを流し込む。メアリは田の前のグラスに手をつけることなく、真剣な面持ちでじっとテーブルを見つめていた。

頭の整理がついたのか、メアリがゆっくり顔をあげた。

「アリス、本気でそのバロンと旅に行く気なの? 素性もわからぬ相手なのよ。それに入じやないし……魔法なんてわからない力を持つている。私は旅に出る事に……賛成できない」

メアリの顔は本気だった。

「でも……メイフォルトを救う何かが見つかるかもしね。確かにバロンは不思議な人。ついていくことが怖くないわけじゃない。」

旅だってどんな危険があるかなんてわからないし、何が起こるかな
んて想像もつかない

「それなら」

「メアリ！ それでも私は旅に出るって決めたの。覚悟は……して
いる」

「……」

メアリの鋭い視線が私を捕らえて離さない。同様に、私もメアリ
から一瞬も目を離さなかつた。

「アリスの……意地つ張り……」

「ごめんね、メアリ」

メアリは納得いかない様子だけど、私の事をわかつてくれた。

メアリは汗を流すグラスを手に取つて、口をつけた。アイスティ
ーはストローを通つて、メアリの中へ。色のついた液体がグラスの
中を下降していき、見る見るうちに底へとたどり着く。

「ふう」と息を吐いたメアリは、落ち着いた様子でこつちを見た。
「危ない旅だつたら途中で帰つてきてね。アリスが危険な目に遭つ
ているなんて考えたら、不安で不安でしようがないから……」

「うん。約束する」

「それと 私の事忘れないでね。私だけじゃなくて家族の事やカ
ルロス、マルダの事も。みんなアリスの事大切に思つているんだか
ら」

「うん！」

そして、メアリは私が家を離れる理由に手を貸してくれた。

レアドールから遠く離れたところに、メアリはもうひとつ家の家を
持つてゐる。その家に私とメアリ2人だけで旅行することにした。
最長で1ヶ月の長旅。メアリはその家へ、私はバロンと旅へ。

私が旅から戻ってきたら一番に会いに行くこと。怪我なんて絶対しないこと。いつも帰りを待つ人々のことを考えること。それら全ての事を承諾して、私は嘘の理由を手に入れた。

「メアリ、ありがとう」

「ううん。元気に戻ってきたら許してあげる」

心配してくれているメアリの言葉は心強かった。すべてを成し遂げて、絶対戻つてくる 私はそう決心した。

夕食の時間に、明日からメアリと旅行に行く事を話した。突然の話だったが、両親は『メアリさんが一緒なら』と許してくれた。

就寝前、私は手紙を書いた。どうしても伝えておきたい事があったから……。

手紙を書き終えると、明かりを落としてそのままベッドに潜り込んだ。メイに“おやすみ”と言い、私は瞼を閉じた。

次の日、私は昼過ぎに家を出た。家を出た後メアリと合流して、隣町への交通手段として用いられる駅へと向かつた。

駅のホーム。ベンチに腰をおろした私は、メアリと最後の会話をした。蒸氣を吹き上げながら近づいてくる汽車が、別れの時間を知らせる。汽車がホームを出る直前、メアリは私に『がんばつね!』とホールを送つてくれた。

メアリを乗せて、汽車は走りだす。

私はメアリに『ありがとう』と叫びながら、姿が見えなくなるまで手を振り続けた。汽車の去つたホームには、汽笛の音がこだまし続けていた。

空に星が瞬きだす頃、私は街外れの草原にいた。少し高台となつたその場所からは、街の景色を一望することができる。自分の育つた街をしつかりと目に焼きつけながら、時間が経つのを待つていた。

街の明かりが一つ一つ消えていく。夜風が冷たさを増していく。ふんわりと私の髪を巻き上げる風は、潮の匂いを運んできた。鼻をかすめたその匂いに、私の思い出が目を覚ました。

あの夏の日

イカダを完成させた私たちは、旅に出る準備を始めた。荷物には、

食料ばかりを詰め込んだ。詰められるだけ詰め込まれた大きなバッグはお腹いっぱいの状態で、いつ破裂してもおかしくない様子だった。

出発当日。

波止場に向う私たちの前に、金色の短い髪を逆立てたカルロスが一人立っていた。私とヤックルは2番目の到着らしい。カルロスの荷物も私たち同様お腹いっぱいのようだ。

しばらくするとマルダがやってきた。手には、2本の釣り竿を掲げていて。どうやら私たちと違つて、食料は現地調達するらしいが、エサになるものは持つていない。どうやって釣るのだろうか？ 最後にメリヤがやってきた。メリヤの手に何もなかつた。たぶん、みんなが必要以上の用意をしてくると踏んでのことだらう。実際その通りである。

全員が集まつたところで、イカダを海へ浮かべた。イカダは私たちの思惑通り、しっかりと海に浮かんでいた。浮かんだイカダに、まずカルロスが乗り込む。続いて、ヤックルがイカダに飛び乗つた。私とメリヤはそのあとで、時間をかけながら慎重にイカダへと足を乗せた。

岸に残つたマルダは、荷物をイカダに乗せていく。荷物を積み終わり、漕ぐための板をカルロスとヤックルに渡して、最後にマルダが乗つてきた。

すべての準備は整つた。永遠に続く地平線を目指して、私たちの旅は始まつた。カモメが門出を祝う詩を歌い、魚の群れが私たちの旅路を先導する。この先に待つ困難や恐怖 それらを乗り越えた先にあるモノを見つめ、私の瞳は今までにない輝きを放つた。冒険者の夢を乗せて、イカダが海を走り始める。

さあ、冒険の始まりだ

…… そうなる予定だった。今から私たちの楽しい夏が始まる予定だった。まさかイカダが海に引きずり込まれるなんて、誰も予想だにしなかった。

しつかりと子供5人を浮かべられるように作られたイカダ。荷物もしつかり乗せられる用に作られている。私たちの誤算は、荷物が人一人分以上の重さになってしまった事。子供6人以上の重さに、イカダは耐えられなかつた。

最終的に浮かんだのは私たち5人と、マルダの釣り竿だけ。私たちの旅は始まつた瞬間、同時に終わりを迎えた。

色々な懐かしい記憶が蘇つてきた。この街は私の思い出そのものなんだ、とその時気づいた。しばらく離れることを惜しみながら、明かりが消えていくのをその眼に焼き付けた。

街中の明かりがすべて消えたとき、草原を歩く音が聞こえてきた。

「アリス、約束通り迎えに上がつたよ」

月明かりのもとでバロンが佇んでいた。私は腰を上げると、大事な出発の一歩を踏み出した。

「私の手につかまりなさい」

そつと差し出される左手。私はバロンの横に立ち、右手でその手をつかんだ。

「それでは行こうか。私は記憶を探す旅へ、アリスは友を助ける旅へ

そういうと、バロンの体がやさしい光に包まれていつた。

バロンの左手から温かさを感じる。それは何ともいえない、やさしい温もりだつた。次第に光は彼の体から、私の右手を伝つて私の体をも包んでいく。私の体を光が包んだ時、バロンは右腕を上げて、ステッキを空高く掲げた。

「今より空を駆ける。手を放さないことだけ考えなさい」

ステッキの宝玉が青い色に輝いた。フワツとした感覚が全身を流れれる。下を見ると、足が地面から離れている。

宝玉の輝きが、更に強さを増した。

その瞬間、私の体は空高く舞い上がった。

一瞬の出来事に私は固まつていた。視点をそつと下にずらす。地上があんなに遠くにある。視点を横にずらすと、幾つもの光が集まつているところがある。隣町のハルバニアだろうか。

ゆっくりと頭の中で状況が整理されていく。今の状況を理解したとき、私はパニックに陥つた。足をバタつかせて、まるで泳げない子供のような格好である。

「慌てることはない。ゆっくり体の力を抜いてやればいい」

バロンは落ち着いた様子で私を誘導してくれた。気持ちを無理やり落ち着かせて、暴れる体を押さえる。

ゆっくり、ゆっくり……。

次第に膠着した筋肉がゆるみだす。気持ちも硬さが抜けていく。余計な力が抜けたとき、浮いている感覚に慣れていた。

バロンを見ると、『もう大丈夫だよ』と微笑みを浮かべていた。

「バロン、これからどこに行くの？」

「リサルドという小さな村に向かうつもりだ。そこには私の家がある。今日は夜も更けてるので、体調を整えて明日から本格的に旅をしようと思うが、どうかな？」

私はうなずいた。

「 それでは急いでか 「

一度身体を持ち上げられたような感じがした後、私たちは前かがみになり空を駆けだした。私は育った街を背に、心の中で別れを告げた。

お父さん、お母さん、ヤックル、メアリ、カルロス、マルダ……今からこの街を離れ、旅に出ます。しばらくのお別れです。でも必ず帰つてくるからね。そのときまで待つていてください。それじゃあ……行つてきます！

流れゆく雲と行き交いながら、風と共に空を進む。月明かりを全身に浴びて夜空を舞うどこのは、とても気持ちがいい。空を飛ぶのは、私にとって初めての体験。それは、蝶や鳥のように空を飛びとこゝものではなく、風のよじて空を吹き抜ける……そんな感じだった。

眼下に広がる草原や海原を越え、いくつもの山々を通り過ぎていく。夜とこゝ事もあって、今どのあたりを飛んでいるのか検討もつかない。

しばらく行くと、田の前に大きな雲の群れが見えてきた。幾重にも層を重ねた積乱雲だ。

私たちは避ける事なく、雲の中に飛び込んだ。雲の中は視界が悪く、何も見えない。この世界では、先導するバルーンだけが頼り。しつかりと手を掴み直して、視界が開けるのを待つた。

雲の中を進むにつれて、周りが明るくなってきた。出口はもうすぐのようだ。

雲を突き破ると、田の前に星空が広がった。澄んだ空氣の中に浮かぶ星々は、今まで一番輝いて見えた。

今いる場所は雲の上の世界。なんとも不思議な雰囲気を醸し出している。その中に、大きな黒い塊が浮かんでいる。

雲に浮かぶ島だ！

田の明かりだけではよくわからないが、その島には小さな光がいくつか灯つていて誰かが生活しているようだ。

私たちは今その島に向かって進んでいる。どうやらリサルドという村は、あの島にあるらしい。初めて目にした浮かぶ島に、これが

ら始まる冒険への期待がより一層高まつた。自分の知つてゐる世界がちっぽけなモノであることを感じる事になるんだうな……、そう思つた。

島に降り立つと、体を取り巻いていた光がいつの間にか消えていた。それと同時に、私は寒さに震え出した。雲の上に浮かぶこの島は、私の街より気温がだいぶ下がつてゐるようだ。

私は先程まで握つていていた手を、ゆっくりと離した。すると、バロンは私の正面に立ち、一言つぶやいた。

「よつこむ、アリス。リサルド村へ」

リサルド村は、島の端から少し歩いたところに位置していた。縁に包まれた島にあるその村は、生活の場として利用される場所以外は自然をそのまま残しており、多くの木々が空へのびのびと背伸びをしている。歩いている道は砂利で舗装されていて、歩くとジャリ、ジャリという音を立てた。道の脇は草木が生い茂り、私の背丈くらいまで伸びていた。

真つ直ぐ延びる道を歩いていくと、途中右側に曲がれる所があり、その先には球体をしたものが見えた。まるでボールが半分土に埋められているような物体。これがリサルド村独特の家の形らしい。球体の端っこには、筒状のものがチヨコンと顔を出し白い煙を吐いてゐる。おそらく煙突だと思う。家の高さは私の身長より少し高いくらいだろうか。さつき歩いてきた道からでは草が邪魔をして、そこに家がある事がわからなかつた。

私たちは右に曲がりずに、そのまま真つすぐ進んだ。途中で左に

折れて進んでいくと、その先に1軒の家が見えてきた。ここがバロンの家。

バロンは右手で扉を押さえて、私を中に招いてくれた。

家中に入ると、そこには大きな空間が広がっていた。外観からは決して想像できない広さだ。私が先ほど家だと思っていたものは、どうやら屋根の部分らしい。この家の家は地面を掘り起こして作った大きな穴の上に、ドーム型の屋根を取り付けることで造られている。地肌はすべて板で隠されていて、地中にあることを感じさせない。

初めて見る家に、私は感動していた。

「ここが私の家だ。歓迎するよ、アリス」

バロンはニッコリと笑っていた。

階段を下りて、1階に当たる場所へと案内された。中央に橜円型の大きなテーブルと椅子が4脚、壁際には本棚やタンスが置かれている。バロンは中央のテーブルに行き、椅子を引いて待っている。私は指定された椅子に腰をおろした。

「外は寒かつただろうから、何か温かいものでも用意しよう。何がいいかな？」

「えーと、ミルクをお願い」

「わかった」

バロンは部屋の奥にあるキッチンに歩いて行つた。キッチンはこの部屋で唯一レンガを使用して造られた場所で、火事が起こらないよう壁まで設けてある。キッチンの上には煙突があり、伝つていくと地上まで伸びていた。

部屋を見渡すと、他にもいろいろなものが目に映つた。

床の上に敷かれた真っ赤な絨毯 鮮やかな色合いが高級感を漂

わせている。壁にかかっている絵画 人で溢れかえった通りに色々お店が並び、空には無数の風船が浮かんでいて陽気な雰囲気を感じさせる。どこかのパレード風景だろ？……。部屋の隅に設置された本棚 隙間なくキッチリと本が並べられていて、むずかしいタイトルの物から私でも知っている知名度の高い物まで幅広いジャンルの本が納まっている。壁に建てつけられた梯子 私から見て前と後ろに一つずつある。それぞれロフトのような空間につながっているみたいだけど、ここからではその空間にどんな物が置いてあるか確認はできない。

色々なものを観察していく中で、この部屋がきれいに整理されている事に気づいた。よく見れば、チリやほこりも落ちてない。部屋を見ただけで、バロンの性格が読み取れてしまう。私はクスッと笑ってしまった。

「どうぞ」

湯気を立てるコップの一つが、私に差し出された。バロンは珈琲の香りを漂わせているコップを抱えて、私とは向かい側の席に座つた。

「お味はどうかな？ 地上の物とこの物ではすこし味が異なるから心配しているのだが……」

「うん、おいしい」

「それは良かった」

冷えた体をミルクがゆっくり温めていく。なんだかホッとしため息をつきたい気分だ。

飲み終えるとバロンはコップを掲げて、キッチンへ向かった。そして片付けが済むと、すぐにこつちへ戻ってきた。

「アリス、体の調子はどうだい？」

「ん？ 大丈夫だけど……」

「ふむ。空を飛んだのは初めてだらうから少し心配していたのだが、

異常はないようだな 安心したよ。ただ気づいていないだけで体は疲れているかもしない。ここも慣れない環境だから、今日は早めに休むと良い』

「うん

「後ろの梯子を登ったところベッドがあるから、そこを使ってくれ

「わかった。ありがとう、バロン』

私は立ち上がって、後ろにある梯子に手を伸ばしました。

梯子を登った先には、小さなテーブルとベッドがあった。味気ない部屋だが、客間としては申し分ない設備である。

私はバロンの方に振り返つて『おやすみ』といい、ベッドに向かつた。

「アリス、おやすみ』

バロンの声を聞きながらベッドに入った私は、スッと眠りに落ちていった。

目が覚めると、パンの焼けたいい香りがしてきた。久しぶりにぐつすり寝ていたためか、体がいつもより軽く感じる。私はいつもどおり起き上がろうとする。しかし、何か……違和感がする。

あれ？ 窓から差し込んでくる光が……ない。

よく見ると、見慣れない天井。窓はなく、その代りに天井に小さな穴があいている。部屋を見渡すと、隅に本棚があり、近くには小さなテーブルが置いてある。テーブルの上には私のバッグがある。状況を整理して、しばらく考えた。

あ、そうだった！ ここはバロンの家だ。

私は、自分が今どこで何をしているのかを思い出した。

起きたばかりで強張っている体を、ゆっくり背伸びして筋肉をほぐしてあげる。その後、ベッドから降りた私は着替えに取り掛かった。バッグから白いコートとドレス風の赤いワンピースを取り出す。身支度が済むと、1階へ繋がる梯子に手をかけた。

「おはよう、アリス」

料理をしながらバロンが声をかけてきた。

「おはよう、バロン」

私は1階へ降りると、キッチンに向かつた。

「ゆっくり休むことは出来たかな？」

バロンが柔らかい表情で問いかけてくる。

「うん。疲れてたみたいで、ちょっと寝過ぎちゃったかも」

「ははは。それを聞いて安心したよ」

「何か手伝うことはある?」

「そうだな……それならそこに置いてあるミルクをテーブルまで運んでくれないか?」

「うん。わかった」

慣れた手つきで料理をするバロン。その手際の良さから、毎日料理をしていることが窺える。私は床に置いてあるミルクの入った容器を持って、テーブルへと歩き出した。テーブルには焼けたてのパンとサラダが並べられ、トッピングに5種類のジャムが添えてあった。

バロンの作ったスープがテーブルの置かれたと、朝食の準備は完了した。よく眠れたせいか、お腹はペコペコだった。食事中、口をリスのように頬張らせながら食べる私を見て、『そんなに慌てなくてよいのだよ。時間はゆうぐりあるのだから』とバロンは言った。

20分ほどでテーブルに置かれたすべての皿は空となつた。いっぱいになつたお腹では、今すぐ動けそうにない。遠慮せず黙々と食べていた私は、食後椅子から動けずに座つたままの状態で過ごしていた。

「バロン」

後片付けをしている彼に呼びかける。

「今日はどこに行くの?」

「そうだな……はつきりと決めてるわけではないが、H街の都アーラタシスに行こうかと考えている」

「そつかあ。マルス・ファーレットってH街のお店だったわね。

そこなら何か見つかるかもしれない」

目的地となる場所を聞いて、旅への実感がわいてきた。

食事をして2時間くらいが経つた後、私たちはバロンの家を出発

した。

バロンの家を出でしばらく歩いていくと、道の先から1人の女性が歩いてきた。

「あらバロン、こんにちは。今日もお出かけ?」「こんにちは、レミアさん。天気もいいようなので、少し遠くまで行こうかと」

簡単なあいさつを交わすバロン。

レミアさんと呼ばれる女性は、私たちと同じような人に人の顔をしていた。背格好も同じだ。てつくりこの村の人はバロンと同じような人達なんだうつていたが、違つたようだ。

「そちらにいるお嬢さんは?」

「あ、はじめまして。私はバロンの友人でアリスと言います」「かわいらしいお嬢さんね。よろしく」

会釈を済ませて、私たちはレミアさんと別れた。

「ねえ、バロン」

「ん?」

「バロンは昔からこの村で暮らしているのよね?」

「そうだな。記憶をなくしているからはつきりと言えないが、私の覚えている限りではそういうことになるね」

「この村の人で、バロンと同じような人はいるの?」

「とこうと?」

「さつき会つたレミアさんの外見は私たちと同じ人間だつたでしょ。バロンは人間のように話をしたり2本の足で歩いたりできるけど、見た目はネコの姿をしている。もしかしたら同じような人がいるのかなつて思ったの?」

「……なるほど。この村に私と同じような人はいないよ。残念だが、私以外はアリスと同じ人間だ」

「けど、みんなあなたを見て驚かないでしょ?」

「そうだな。この村の人達は、いろんな事象を柔軟に受け入れる事が出来るのだろう。最初は皆驚いていたが、すぐに私の事を受け入れてくれたからな。アリストと同じさ」

そう言うと、バロンは何か懐かしむような表情を浮かべた。

ザク、ザク、ザク……

何かの音が近づいてくる。その音に私の体は反応した。

ゆっくり呼吸を始める体。口が開き、吸い込んだ空気が、体の中に染みこんでいく。体に温かいものが流れ出す。流れ出したものは体の隅々まで行き渡ると、そこから体の中心へと戻ってきた。開けた口からは、先ほど吸い込んだ空気が外へと放たれていた。

瞼がゆっくりと上がっていく。暗闇だった世界に光が差し込んでくる。光の中から現れたのは、無数の木々と地面を覆う落ち葉だった。

私は今、木の幹に体を預ける形で座っているようだ。ぼおーっとした頭の中を、先ほどの音が音量を上げて響き渡っている。

私は首を回して、音のする方を見た。

音が止む。

すると、誰かの話声が聞こえてきた。

「あれは何だ？」

「さあ～あ、今まであんな人あつた事がないからな。服は着てるみたいだが

「ホントだ。何かえらい人が着てるような高そうなものだな」

私の瞳に、指をさす男の姿が2つ映る。

「あの……

「　　おい、今しゃべつたぞ！」
「言葉は通じるみたいだな……。お~い、あんたそこで何をしているんだ？」

私はここで何をしていたのだろう？

思い出そうとしてみたが、何も出てこなかつた。私がここで何をしていたのか……わからない。わからないというより記憶にないと言つた方がいいだろうか。先ほど目を覚ましてから今までの記憶以外、私には残つていねようだ。

「申し訳ないが、私にもわからない」

2人の男はお互いの顔を見合せた。

「どういう事だ？ クロン……わかるか？」

「いや、おれにも」

しばらく困惑した顔で話し合つた後、もう一度こっちを振り向いた。

「あんた名前は何というんだ？」

「私の名前は……申し訳ない。やつぱりわからない」

「わからないってあんたの名前だぞ。そんなことあるわけ

「いや、わからないというより思い出せないと言つた方がいいのか

……」

「思い出せないのかい？ それはまた難儀な……。体の方は大丈夫かい？」

私はゆっくりと体を起こした。

「体の方は　　どうやら大丈夫みたいだ」

「そうかそうか。で、これからどうするつもりなんだ？　どこか行くところでもあるのか？」

「いや……さつき田を覚ましたばかりで……」

「なあ、イアン。この人を森の外まで案内してあげないか？　たぶんここがどこだかもわかつてないと思うぜ。どうせ、おれたちも村

へ帰る予定だしよ」

「そうだな。それなら、一度私たちの村に寄つてもらうといい。この人困つていいみたいだし、何かの助けになるかもしれないからな」
「氣前がいいのだろう。2人は私を村に案内してくれるそうだ。私は2人の心遣いに感謝し、一緒についていく事にした。

2人の後を追うようにして森を抜ける。森を出た時、大きな木々に遮られて見えなかつた空が広がつた。オレンジ色と朱色が混ざり合つたような、それはそれは美しい夕焼けの空だつた。

2人に連れられて、道なりにしばらく歩いていくと1軒の家が見えてきた。家の前まで来るとイアンは『ここで待つように』と言い残して、家中に入つていつた。しばらくして出てきたイアンは、

「さあ家中へ」

と、私に声をかけた。家のドアに手をかける。振り返ると、2人はただ黙つてこつちを見ていた。

「あなた方は中へ入られないのか？」

「ああ。私たちはここで帰るが、安心してください。村長はやさしい人だから、必ずあんたの助けになるよ」

「……色々と親切にしてもらつて、2人とも本当にありがとうございます」

「なあ、に気にしなさんな。困つている人を助けるのは当たり前だからな。今度はあんたに助けてもらうさ」

そういうつて笑いながら、私を見送つた。

家中に入ると、暖かな空気が私を包んだ。この家は地面を掘つてできているため、外よりも気温が高くなつていて、部屋を照らすランプのオレンジ色をした光がまた、温かな色をしていてより一層身体を温めた。

一階へと続く階段を降りると、一人の老人が椅子に腰をかけていた。

「ようこそ、私は村長のネイルという者です」
老人は腰を上げて、言葉を発した。

「はじめまして」

私も頭を下げながら言葉を返した。

「イアンの話だと、あなたは記憶を失っているそうですね。何か思い出したことなどはないのですかな?」

「残念ながら何一つ思い出せない今まで……」

「そうですか。何か手掛かりになるものがあればよいのですがね。あなたの洋服に、手掛かりになるようなものは残っていないのですかな?」

そう言われて、ポケットの中を探つた。

まずはズボン。右ポケットには、何もない。左ポケットには……やつぱり何もなかつた。上着の方も調べてみたが、結局何も出てこなかつた。

「何の手掛かりもないようですね……」

「そうみたいですね」

村長は私をじっと見つめて、何か考えているようだつた。
「ふむ。ということは、行く宛ても……帰るとこももないという事ですね」

「はい。そういうことになります」

「見た感じ……あなたは悪い人ではないようだ、服装もしつかりしてらつしやる。外見は……少し変わっていますがね。もしあなたが望むのであれば、住む家くらいはこの村に用意できますが、どうですかな?」

私はしばらく考えた。だが、行く宛ても帰る場所もない私に残された答えは一つだつた。

「申し訳ない。しばらくの間、厄介にならせていただく事にします」
私の返事に、ネイルの顔が僅かに緩んだ。私たちは“これからよろしく”という意味を込めて握手を交わした。

話が終わった後、ネイルは村の人たちを集めた。そのなかにはイアンとクロンの姿もあった。何が始まるのかという不安からか、辺りはシーンと静まり返っている。

ネイルに連れられて、私は皆の前に立たされた。村人のほとんどは目を丸くして私を見ている。おかしな容姿をした私に対し、何かを感じているようだった。

「みな集まつておるな」

ネイルの声が広場に響く。

「今日から村で暮らす者が1人増えることになった」

そういつて私の方を向いた。

「彼の名前は バロン。初めの内は慣れない暮らしに戸惑うだろうから、みんなで助けてやつてくれ」

村長からの紹介を受けた私を、村人は不審に思いながらも拍手で迎えた。

バロン　それが私の名前である。生活する上で名前がないのは不便だろうと、ネイルと私で考えた名前である。名前の由来は、ある小説の登場人物。私の服装が小説内にでてくるとその人物に類似していた事から、名前を頂く事になった。初めは“バロン”という名に違和感を覚えたが、今では結構気に入っている。

「はじめまして、バロンと言います。皆さんには迷惑をかけると思いますが、どうぞよろしくお願ひします」

私は初めて自分の名前を呼び、村人へのあいさつをした。先ほどよりも盛大に贈られる拍手を受けながら、バロンとしての生活は始まった。

バルトンの家から随分と歩いてきた。視界には島の終わりが映つている。

「いらっしゃが、昨日降り立つた場所かな？」

バルトンが足を止めて、こっちを振り向いた。そして、そっと手を握ってきた。

「要領は昨日と同じだ。慌てる必要はない。私の動作を見て、真似るといい」

昨日の感覚がよみがえつてくる。

空を駆け、風を切る感覚。

昨日は周りが暗かつたため景色をじっくりと眺める事が出来なかつたが、今は太陽が高々と上っている。きっと空からの景色は素敵なんだろう、期待に胸が膨らんだ。

「行くぞ」

掛け声と共に、二つの光が舞い上がつた。限りなく澄み切つている空に二つの光が線を描きながら、遙か彼方へと飛び立つていった。

空が澄み切つているため、遠くの方までよく見える。視界いっぱいに広がつた光景は、想像していたよりも素敵なものだつた。

緑色をしたキャンバスに、細い水色の線が模様を描いている。所々肌色に塗りつぶされた部分も見受けられ、壮大な絵画にアクセントをつけていた。きれいに緑を切り取つた所からは、賑やかな音が聞こえてくる。鮮やかな色を取り入れたその場所には、他とは違つた美しさがあつた。

吹き抜ける風と照らし続ける太陽の光。今日は過ごしやすい日に

なりそうだと、私は思った。

2つの山を越えたとき、2つの光はゆっくり下降を始めた。目的地まで、もう少しのようだ。しばらくすると、私たちの前方に大きな街が見えてきた。2つの光はその街の手前にある森の中へと降り立つた。

着陸した場所は、大きな幹をもつた木々がひしめき合い、その中でエメラルドグリーンの色をした水が輝きを放つ、静かな湖のほとりだつた。空を覆うほどに伸びた枝。その枝の隙間から光が差し込んでいて、辺りを涼しい空気が包んでいる。人の関与を受けないこの場所には、人が忘れてしまった緩やかで静かな時の流れが流れていた。

私たちは地面へ足をつき、無事着地する事に成功した。地上を半日ほど離れていただけなのに、何ヵ月か振りに地面を踏んでいるような感覚が襲つ。空に浮かんでいた島にも地面はあるが、地上とはやつぱり違うようだ。

バロンは、降り立つとすぐに準備に取り掛かつた。カバンから取り出したのは、細長い布。それを顔へと巻いていく。

なるほどじね。

私は隣でバロンの準備が終わるのをじっと待つていた。

「待たせてしまったね」

顔をきれいに布で隠したバロン。その異様な佇まいは、いつ見ても私を驚かせる。顔を出すと騒ぎになるのはわかるけど、その顔もどうなんだろう？

複雑な気持ちを抱えつつ、私たちは街に向かつて歩き出した。

森を抜け、田舎道を歩いて行くと、大きな門が見えてきた。門をくぐった先には、アルアタシスの街並が広がっていた。

まず目に飛び込んできたのは、延々と続く大きな通り。赤色と茶色、オレンジに黄土色と、色とりどりのレンガで舗装をされていて実に鮮やかである。そこを多くの人が行き交っていて、まるでお祭りのような賑わいを見せていた。通りの脇には、店が列をなして並んでいる。レンガで出来た建物にお店を構えているところもあれば、建物の前に布の屋根を張つて木製の棚に商品を陳列させているお店もあった。

工芸の都アルアタシスは、レア・ドールの3倍ほどの大きさがある。来たことはないが、噂だとほとんどの工芸品がここで作られているらしい。作られた工芸品が各地方へと輸送され、売られているとか。

私たちは大通りへと足を踏み入れた。人集りの中をすり抜けるようにして進んでいく。通り過ぎる人々は、バロンの姿をちらちらと見ていく。目立つてはいるが、誰も何も言わない。たぶん関わりたくないからだろうか……。とりあえず騒ぎになることがないと安心した私は、出店に並ぶ数々の工芸品を眺めながら歩いた。

さすが工芸の都。私の知らないものが所狭し並べられている。木で作られたヘンテな生き物（ドラゴン？）やきれいな石を散りばめて作られた王妃の肖像画。透明な容器に入っている帆船のレプリカは、光のある角度で中の水の色が変わって、子供が喜びそうな工夫が施されている。

私の瞳は真新しいものとの出会いで輝いていたに違いない。しばらく時間を忘れて、工芸品を見る事に夢中になっていた。

街の中を随分と歩いてきた時、とあるお店の前で自然と足が止まつた。この街で見たものには驚かされてきたが、この店に置いてあるものはそれらとは違つた不思議な印象を持たせるものだった。

「お嬢ちゃん、いらっしゃい」

店の主人が声をかけてくる。私はその声を無視して、ある物へと手を伸ばした。

「これ……」

青い色をしたきれいな石を手に取る。石は青白い光を灯しては消え、また灯しては消え……と一連の動作を繰り返し続けていた。

「なかなか目の付けどころがいいね。それはね、ラピスラズリと呼ばれる石なんだ。近年では存在 자체が危ぶまれていたのだが、先日偶然落ちているのを拾つてね。不思議な石だろ？ それは600年前まで魔法の力を留めるために用いられていたらしいからね。その石にも少しだけ、力が残つてゐるのさ」

店の主人は自慢げに話をした。

「この石つて珍しいものなんですか？」

「ああ。何て言つたつて、この石を見つけたのは600年前から今までの間で、私を含めると2人しかいないからね」

そんなにすごい石なんだあ、と感心した。でも、私はこの石を見たことがある。ただ……自然に光を放つてゐるのは、初めてだけど。「ねえ、バロン。そのステッキについている石つて、これなのかも

」

私はバロンの方へ振り向いた。ステッキについている石と、手の平で光を放つ石を比べてみる。

やつぱり同じものだ。

「こりゃ……すごい。こんな大きなラピスラズリがあるとはな……」

「おじさんから見てても同じなんですね？」

「ああ……ただ光つてないとこらを見ると、石に力はないようだが

……」

おじさんは口を開けたまま、バロンの石を見つめていた。

「申し訳ないが、ご主人。この石について他に知っていることはないか？」

今まで口を閉ざしていたバロンが訊ねる。

「悪いが……さつき話したこと以外は何も」

「そうか」

「気を落とさないでくれ。そうだな……この道を真つすぐ行くと広場がある。広場には噴水があるから、それを目印にするといい。そこから左に曲がって真つすぐ進んでいったところにルネ・モリーニというお店があるんだ。600年以上前から続いている店だから、そこの人なら何か知っているかもしれない」

「ありがとう。その店へ行つてみる事にするよ」

「ありがとう、おじさん」

親切してくれたおじさんに手を振つて、私たちは笑顔で店を後にした。

さつきの話通り、進んだ先には噴水を中心に構えた広場があつた。噴水の周りにはベンチがあり、歩き疲れた人々が腰をかけている。広場の左側には、進んできた道より少し狭くなつた道がある。私たちはそこを休まず進み続けた。

肌色をした看板に群青色でルナ・モナーニという文字。5分ほど歩いたところに、そのお店があつた。

レンガで出来た2階建ての建物で、2階が住居になつている。1階のお店からは古びれた感じせず、内装もきれいにしてあつた。唯一壁に取り付けられた看板だけが、600年の歴史を醸し出していた。

お店のドアを開け、中に入る。

カウンターには、一人の青年が腰を掛けっていた。まだあどけなさ

の残る顔で、この店の主人とは思えないほど若い。店の中には客人がおらず退屈しているのか、頬杖をついてカウンターにうつ伏せている。

「いらっしゃい。何をお探しですか？」

「すみませんが、ちょっと聞きたい事があつて……」

私はバロンの持つていたステッキを受け取り、青年の方にそのステッキを差し出した。

「このステッキについている石について、何か知つてることはな

いですか？」

「うーん。ちょっと見せてもらつてもいい？」

ステッキを渡すと、青年は真剣な顔で石を観察し始めた。さつきの態度とは一変して、鋭い眼光でステッキを観察する工芸職人の姿に、私は少し驚いた。

しばらくすると、観察していた彼が固い表情を少し緩めた。

「たぶんだけど……ラピスラズリだよね？」

「ええ。その石について知つている事があつたら教えてほしいの」

私はバロンを代弁して話を進めた。

「そうだな。昔この世界の人々に不思議な力があつた頃の話だ。ラピスラズリは他の石にない特別な効果を持つた石として重要視されていた。その効果とは、不思議な力を引き出す事だ。理屈はわからぬが、ラピスラズリを持つことで力をを使えたらしい。もう一つ不思議な力を留める効果も持つていたと聞く。まあ600年以上も前の話だけだな」

頭をかきながら、青年はステッキを私に戻した。

「だけど、そんなこと聞いてどうするんだ？」

彼の言葉で、ここにきた目的を思い出した。

「私たちレアードールという街からやつてきたの。その街には600年前にマルス・ファー・レットというお店があつて、このステッキはそのお店の作品。とても貴重なものらしいんだけど、作った人がわからないの。もしかしたらこの街から来た人なのかも、そう思つて

調べているんだけど……」

私はでたらめを並べた。

別に考えなしにしゃべったわけではない。マルス・ファー・レットが魔法を秘めた物を扱っていたのだから、このステッキがその店で売られていたと考えられなくない。それに、こういえばお店の人について、何か情報を掴めるかもしれないと思った。

「うん。どうだらうな？ 昔この石を使った作品を手掛けていた人はいると思うが、そんな昔の記録が残っているかどうかだよな……。一応何かないか調べては見るけど、結構時間がかかると思うよ。また明日来てくれないか？ その時までに調べておくから」

「うん、わかった」

「あと、うちは商売をしている身だ。それなりの情報料は頂くから、用意してくれよ」

約束を交わした私たちは、お店を後にした。いつの間にか外は夕焼けの色に変わっていた。

リサルド村に戻ってきたとき、空には月が浮かんでいた。帰り道を照らす月を見ながら、今日の事を整理していた。

バロンの持つているラペスラズリといづ石。600年前から見なくなつたという不思議な石。バロンの記憶にあるマルス・ファーレットという店の事を考へると、やっぱりバロンは600年前から生きてきた人という事なのかな？ 魔法が使える事を考へると、そうとしか言いようがない。だけど600年もどうやって生きてきたのだろう。姿が人でないからわからないけど、私たちより寿命が長いのかな？ それとも時代を超えてきたとか？

わかつた事があれば、そこからわからない事が出てくる。それでも今日の事は決して無駄じゃない。バロンの旅においても、私の旅においても……。

「アリス、今日はありがと」

突然バロンがお礼を言つてきた。

「いきなりどうしたの？」

「今まで私一人で旅をしてきたのだが、今日のようないろいろな情報が手に入ることはなかつた。包帯を巻いた姿では、私の話に耳を傾けてくれる者などいないからね。だから、お礼を言いたくなつた

ありがとう」

「そんな……お礼を言われるよつた事じゃないわ。ううん、むしろお礼を言いたいのは私の方。バロンと出会いつたおかげで、今まで知らなかつた事を知ることができたもの。きっとこれからもそういう出会いがたくさんあるはず。だから、お礼なんていいの」

「そうか。しかし、アリスの探し物については質問していなかつたようだが、よかつたのかい？」

「そんなことないわよ。ラピスラズリには魔法を留めているものがある それを知ることができただけでも十分。それに……バロンの旅に無理やりついて来ているんだから、バロンの事を優先するの は当然のこと」「

私はにつこりと微笑んで見せた。

時間があまりないのはわかつていたけど、事を急いで焦つてしまつたら何もかもを失つてしましそうな気がした。それに、バロンが何者であるか知りたい、という思いもあつた。

話し込んでいるうちに、バロンの家が見える所まで来ていた。外は少し冷え込んできているため、肌を露出している部分の感覚が、若干麻痺してきている。早く温かい場所へ行きたいと、歩くスピードが速さを増した。

ドアを開けて家に入ろうとしたとき、誰かの声が突然聞こえてきた。

「旦那、久しぶり。今日は女の子なんか連れてどうしたんだ?」
声がする方へ振り向く。そこには一本の木。木の周りに人影は見当たらない。

まさか木がしゃべりだしたの?

すると、バロンは木の方を見て返事を返した。

「ヤンクロックか? わざわざ訪ねてくるなんてめずらしいな
木の方に違和感がある。枝に何かが乗つかつてている 私よ
り少し大きいくらいの何かが……。

「なあに。ちょっとした情報を教えに来ただけさ」

言葉を発した瞬間、枝から影が消えた。

サツという音を立て、何かが地面に飛び降りてきた。よく見ると、長い手足にガツシリとした体をしている。股下では尻尾が揺れおり、背中から出ているのは翼のようだ。服装は藍色の生地にオレンジ色のラインが入ったポンチョを羽織つて、下には肌色をした皮のズボンを履いている。肌が緑色をしていて、少し不気味な感じがした。

私たちの前に現れたモノ。それは怪物以外に表現する言葉がない生き物だった。

「まだ自分が何者なのか調べ回っているんだろ？ 実は今日とびっきりいい情報を捕まえてなあ」

怪物が話しかけてきた。

「そうだつたのか。詳しい話は家の中で聞こつか」

バロンは平然と会話をしていた。どうやらバロンと親しい間柄らしい。私、バロン、怪物の3人は話を一時中断して、家の中へと入つていった。

ランプの明かりで、明らかになつた怪物の姿。暗闇で見た印象よりは、少しマシな感じがする。大きな目と大きな口。おどけたような表情の顔。不気味さはあるが、気持ち悪いとは思わなかつた。

「それで話というのは？」

椅子に着いたバロンは、落ち着いた調子で訊ねた。

「ああ。最近、ユナシス王国のラブリカルトという街の近くで珍しいものが目撃されたらしいんだ。何だと思う？ ょ・う・せ・い・だとよ。驚いただろ？ しかもその妖精がエルフらしいんだ」

こんな場面、世界どこを探しても見るのはできないと思う。

猫の姿をしたバロンとトカゲのような姿をしたヤンクロック、話の内容は妖精の事。あまりに現実離れした会談である。そこに居

会わせているアリスという女の子だけが人間だなんて……。

「しかも目撃者がその街では有名な学者らしくてな、嘘なんて吐いた事がない正直者ときた。信憑性のある話だろ?」

「なるほど。それで、エルフの所在は掴めているのか?」

「いや、それはこれからさ。旦那が調べてほしいというなら、調べてやつてもいいぜ。もちろん代金はかなり付くがな」

置いていかれている私はボーとしたまま、椅子に座っているだけだった。

「わかった。お願ひしよう

「さすがは旦那、話が早くて助かるよ

ヤンクロックは愛くるしい表情(?)を浮かべて、指をパチンと鳴らした。

「でよ、話は変わるんだが……そこで呆けてる女の子は誰なんだ?」

ヤンクロックが私に目を向ける。

「ヤンクロックには紹介していなかつたな。彼女はアリス、私と一緒に旅を始めた仲間だ」

「へえ~若いのに旅かい。しかも旦那みたいな人とねえ~」

ヤンクロックの眼が飛び出るように前に出てきた。品定めするよう、私のことをジロジロ見ている。

「は、はじめて……アリスです。あの……ヤンクロックさんはバロンの友達なんですよね?」

恐る恐る訊ねる。

「そうさ。タツキースつて街で会つた時からの仲だ。あのときの旦那は不用心でな、顔を出したまま街を歩いてたんだ。そしたら案の定騒ぎになつてなあ まあ騒ぎにならない方がおかしいがな。そこをおれが偶然助けたのさ」

ヤンクロックは大きな口を開け、笑いながら話をした。

「そうなんですか……。ヤンクロックさんもバロンみたいに不思議な力を持っているんですか?」

「いや、おれにそんなものないよ」

「そうですか……。ヤンクロックさんみたいな人と会うのは初めてだから、もしかしたらバロンと同じなのかと思いました」

「なるほど、人間から見たら俺も旦那も同じに見えるんだな。まあ人間と俺らは容姿が大きく違っているから、そう考へても不思議じやねえ」

失礼なことを言つている私を、ヤンクロックは笑い飛ばしてくれた。

「旦那については俺もわからないが、俺は爬鳥族つて種族の者だ。爬鳥族はここのように空に浮かぶ島で生活をしていて、地上にはほとんど降りてこないからあまり馴染みはないだろうがね。昔はそれなりに人間とも交流はあつたんだけど……。この世界には、他にも多くの種族が生活している事を君は知らないだろう?」

「ええ。他にもいるんですか?」

「ああ、人間から見えないとこりでみんな暮らしているのさ。まあ、旦那みたいな力を持つ者はごく稀だけどね」

「さつき話していたエルフとかですか?」

「勘が鋭いね。それとも知つていたのかな? エルフは昔から不思議な力を持つ種族として有名だからね」

「つまり……エルフに会う事が出来れば、同じ力を持つ者同士としてバロンがどこの誰なのか知つているかもしれないって事?」

「それもあるが、エルフは寿命が長い種族もある。エルフの女王なら1000年位は生きていっても不思議じゃない。旦那について何か知つている可能性が十分あるのさ。もし知らなくて、エルフの中にはモノの本質を見極める事ができる者がいるらしいんだ。そいつに会えさえすれば、旦那がどういう者なのか全てわかるつてわけ。だから彼らに会う事が旦那の旅において一番の近道になるんだよ」

「そうだったんだあ……」

さつきまでの会話がようやく理解できた。

「バロン、よかつたわね」

「ああ。でもエルフは用心深い種族と聞くから、会えるかどうかわからないがね」

「旦那、俺の事信用してないのか？」「うみえて探し物を見つけるのは得意なんだぜ」

「すまない。そういうつもりではなかったのだが……そうだ。アリスもヤンクロックに頼んでおくといい」

「おや？ 君も何か探し物をしてるのかい？」

ヤンクロックがこっちを見る。

「ええ。私は友達が病気にかかっていて、それを治す方法を探しているの。現状では治す方法がないらしくて」

「なるほどね……。それならドワーフの森に行くといい。確かに万病に効く薬草があるって話だから」

「えっ！？ ホント？」

「ああ。俺たちの族長が実際に使ったことがあるらしくてな」

今日は、すごい日だ。バルーンにとつてすごい情報が入ってきたと思つたら、私にもとんでもない情報が入ってきたのだから。旅の初日でこんなことになるなんて思つてもみなかつた。

メイフォルトをもつすぐ助ける事が出来る。

私の頭はそのことどころぱいになつていた。そして、完全に舞い上がつっていた。ついさつと考へていた事なんて、すっかり忘れて……。

“事を急いで焦つてしまつたら何もかもを失つてしまつ”

その後も、ヤンクロックとはいろいろな話をした。いたずら好きの「プリン、湖の下深くに住むエンドロップ、森の木々を家として活用するカルバチカ。彼の話は、どれも具体的でそれらの生活が滲み出ているものばかり。しかも、楽しいエピソードのおまけ付き。私は夢あふれる不思議な話に、じばらくの間魅了されていた。

2時間ほど話し続けた後、ヤンクロックは家を去って行った。今からエルフを探しに行くそうだ。見つかる事を願いながら、私たちには彼を見送った。

1階のテーブルに戻ってきた時、バロンの浮かない表情が目に入つた。

吉報を受けた私たち。私はうれしさのあまり舞い上がっていたが、バロンはそんなにうれしそうな様子ではないみたい。

「バロン、どうかしたの？」

「ん？ いや……少し考え方をしていたのさ」

「さつきの事？」

私は思い切って質問を投げかけた。

「ああ……」

「あまり嬉しそうに見えないけど、さつきの話つてバロンにとつていい話じゃなかつたの？」

「いや、いい話だったよ。この旅を始めて2年ほど経つが、耳寄りな情報はほとんどなかつたからね。やつと私の旅の終着地点が見えてきた、そんな感じだ。ただ……」

「ただ？」

「ずっと探してきたものが見つかる、そう考えたとき急に怖くなってしまったのだよ。私の探し物は、どこかに置き忘れてきた過去の

自分。過去の自分と向き合つ事を思うと、何とも言えない感じがしてね。今の私と過去の私では、歩いてきた道がぜんぜん違う。だから、受け入れる事が出来るのか、少し心配になつたのだよ

私は違うバロンの心境。希望を抱える私と、不安を抱えるバロン。二人の違いは探していたものが未来か過去か、それだけだ。私の旅は幸せを求めるものだから、最後には必ず笑顔になれる。だけど、バロンの旅は自分を求めるもの。最後に待つているモノが、幸せだとは言い切れない。露がかかるような気持ちで続けなくてはならないなんて、なんて辛い旅なんだろうと思つた。

私が心配そうにしていたせいか、その後すぐにバロンは笑顔を取り戻していた。

〔気を遣いすぎなんだから……。〕

だいぶ夜も更けてきた頃、私たちはやつと夕食の時間に入つた。パンに、ベーコンと野菜のスープ、ゆでた卵、メインディッシュに羊のステーキ。十分お腹を満たす量だった。

満たされたお腹は身体を眠りに誘つてくる。私は片付けを済ませた後、口フートへと上がつた。

「バロン、おやすみ」

「ああ、おやすみ」

電気が消された部屋をやさしい眠りが包んだ。

今日は昨日よりも早く目が覚めた気がした。口フートから顔をのぞ

かせると、バロンがあちよつビ様子を下りているところだった。

「おはよー！」

「おはよー。アリス、今日は早いんだね」

「なんとなく目が覚めちゃって……。朝食作るんでしょ？ 私も手伝つからちょっと待つて！」

いつもの倍の速さで身支度をして、バロンのもとへ駆け寄つた。今日は身体の調子がいい。やっぱり気持ちが前を向いているからかな。もう少しで目的のものが見つかる、その事が私を変えるなんて信じられないけどそれ以外理由はないし。

昨日から上機嫌の私は、今なら何でもできそうな気がしていた。

テキパキとした行動で朝食の準備はあつという間に終わった。朝食を食べている最中、私はバロンをじつと観察していた。昨日の浮かない表情が、頭に残っていたからだ。でも今はいつも通り、大丈夫そう。

「今日は昨日のお店に行くんでしょう？」

「そうだな。約束を交わしたから、まずはアルアタシスに行くつもりだよ」

「もしも時間があつたらでいいんだけど……その後、ドワーフの森に寄つてもいい？」

「いいとも。アリスの探しものを見つけに行かないとな」バロンは快く返事をくれた。

朝食を済ませて旅の支度をし、準備が整つたところで外への扉を開いた。

昨日より幾分も軽い足取り。空は澄み切つていて、太陽が暖かい。今日もきっといい事がある、そう思わずにはいられなかつた。雲の上にいるのだから空が澄み切つているのは当然の事、だけどそんなことは考えていなかつた。

今日のアルアタシスは、昨日よりも多くの人で湧きかえっていた。人の波に流されるながらジグザグに道を進んでいく。時々行き交う人とぶつかりながら、昨日のお店を目指した。

「おや？ 昨日のお譲ちゃんじゃないか！」

人ごみの中で聞こえてくる声。左に首をひねると、昨日あの石を売っていたおじさんがドッシリと構えて座っていた。

「おじさん、昨日はありがとうございました」

「なに、礼なんていいよ。今日もお買い物かい？」

「今日は昨日教えてもらったお店にちょっと用事があつて……。あれ？ あの石置いてないんですか？」

「ラピスラズリの事かい？ あれなら今朝早くに売れちまつたよ。どこかのお偉いさんが高値で購入してくれてな。こっちとしてはもう今日は商売しなくてもいいくらいだよ」

おじさんは実に満足そうな顔をしていた。

「よかつたですね。それにしても……今日は人が多いですね？」

「ああ。なんたって月に一度、地方を回る商人どもが集まる日だからな。この街はガリレオン王国とユナシス王国の境目にあるんだ。で、ユナシス王国からガリレオン王国へ向う商人たちが立ち寄つてるので」

ガリレオン王国 王都ベクトリアを中心に、私の住む街やメイフォルトの住む街を含めた300ある街をまとめている国。600年前の出来事以来、ほかの国に比べて飛躍的に技術が発達した国である。そのため他国よりも裕福な環境にあり、経済力のある私の国はいろいろな国とのパイプも充実している。ユナシス王国もそのひ

とつで、多くの物資を輸入しているお得意さまである。

「それでこんなに人が多いんですね」

「ああ。だから今日はおれたち商売人にとって稼ぎ時なのさ。よかつたら何か買つていつてくれ?」

「私、あまりお金持つてないから……」

「それならお譲ちゃんが連れている人が買つてくれるんじゃないのかい? そんな着飾つた服を召しているところを見ると、どう考へても立派なトコの人なんだろ、お譲ちゃんたちは? どうだね、安くしておくれよ」

着ている服に目を向けた。私のお気に入りである朱色のドレス。ちょっと高いものだつて父が言つていたような……。おじさんが私たちを良い家柄の人だと勘違いしても仕方ない状況だつた。

「ご主人。申し訳ないのだが、今日は買い物をするつもりで訪れたわけではないのだ。だから私も手持ちがなくてね……また今度寄らせてもらつよ」

「そいつは残念だ。また今度寄つてくださいな」

戸惑う私に代わつて、バロンがうまく話をつけてくれた。

「ごめんなさい。また来ますね、おじさん」

そう言つて、また人だかりの中へと戻つていつた。

「あ、お譲ちゃんたち。今日は人が多いから盗人なんかには気をつけるんだよ。お兄さんのそのステッキも盗られないようにな!」

最後におじさんの注意を聞いて、目的の場所へと踏み出した。

ルナ・モナーーまで歩いてくるのに、昨日の2倍ほど時間がかかつた。人ごみを歩くだけでかなりの時間と体力が奪われ、まるで店が別の位置に移動したのでは? と思つてしまつた。

お店の扉を開けて中に入る。中には5人のお客様が入つていた。

カウンターには昨日の青年ではなく、中年の女性が立っていた。

「いらっしゃい」

「あの～すみません。昨日調べ物を依頼していたんですけど……」

「ああ、あなたたちかい？ ちょっと待ってな」

そういうと、女性は店の奥へと姿を消した。

しばらくして出てきた女性の後ろに、昨日の青年が立っていた。

「お待たせしました」

青年は礼儀正しく頭を下げた。

「昨日話されていた事について調べたんだが、なにぶん昔のことだからね。なかなか見つからないんだよ」

「それじゃあ……」

「マルス・ファー・レットという人物。確かにこの街で工芸品を作っていた職人だったよ」

鼓動が高鳴りを見せた。

「本当？」

「ああ。うちの古い帳簿で名前を見つけたよ。620年前の事で、その後あんたの街でお店を出したと考えられる。どういった人だったかはわからないけど……」

マルス・ファー・レットとは職人の名前。つまり、その職人が自分の名前をお店の名前に用いたという事らしい。

「これが1日かけて探し出した結果だ。あまり役に立てなくて……ごめんな」

彼は残念そうに呟いた。

「本当はもつとでかい情報を掴むつもりだったんだけどな～。昨日代金の話をしたけど、あれは……無しでいいからな」

最後にやさしい笑みを見せて、彼は奥へと引き返して行つた。

「どうもありがとうございました」

私たちはカウンターに残った女性と奥にいる青年へお辞儀をした。

帰り際、バロンは財布から数枚のお札を取り出し、カウンターの

上に置いた。女性は返そうとするが、

「私たちにひとつはとても貴重な情報を教えてもらつたので、どうぞ受け取ってください」

と、バロンは頑なに返却を拒んでいた。最終的に女性も受け取ってくれて、快くお店を後にすることが出来た。

匂を過ぎた街は、さらに賑わいを増していた。

お店を出た私たちは、来た道を戻っていた。人の減らない道は行く手を遮られて、なかなか思うようには進む事が出来ない。人混みの中を歩いているため、時々肩と肩がぶつかる。その度よろけながらも、私たちは歩き続けた。

何度も体をぶつけながら進んでいくと、疲れが徐々にたまつてくる。他人の体で景色は隠されて、今的位置も掴みづらい。ひとまずこの人ごみから抜け出したい、と心の中で思っていた。

その時、大きい衝撃が私を襲つた。私の体は後ろへと倒される。地面に倒れこむ体をなんとか持ちこたえようとしたが、疲れた体が思うように働いてくれない。体はそのまま地面へ

地面に倒れる瞬間、無意識に手をついた。

「イタツ

少しは衝撃を抑えたものの、お尻は思いっきり地面とぶつかっていた。誰がぶつかってきたのかを確認する。そこには少年が一人立つていた。

おそらく弟よりも年は下だろう。泥やはこりで汚れた服に身を包み、手足には何か所も怪我をした痕がある。少年は何も言わず立ち止つて、私を見下ろしていた。

突つ立つていた少年は、ゆっくり身体を動かしてこっちへ近づいてくる。私の横に差し掛かったとき、手から離れたバッグを少年が拾い上げた。てっきりバッグを私に返して、謝つてくるものだと思つていたのに、少年はバッグを持つてそのまま私の元を立ち去つていいく。

「あつ

そこでやつとわかつた。盗まれたんだ、と。

走り去る少年をバロンが追う。体を起こして、私もそれに続く。

人ごみで見失いそうな少年の姿をバロンはしつかりとらえていた。大通りから建物の間にある路地に入していく。人一人が通れるかどうかの道、そこを体を横にしながら通り抜ける。真つすぐ進むとまた大通りに出て、人波をかき分けながら追いかける。そしてまた、路地裏へ

何本もの大通り、路地裏を通り過ぎていく。途中から道が上りになり、疲れた体に追い打ちをかける。

周りにいる人の数が徐々に減つてきている。土地勘のない私には、今の場所がまったくわからない。どこに向かっているかなんて、もちろんわからない。ただバロンの後を必死に追っている。

15分くらい走り続けてきた。もうそろそろ体力の限界が近い。重くなつた足はもつれそうになり、息をするのが辛くなつてきている。それでもバロンの後姿を目印にして走り続ける。暗い路地を延々と走り続ける。

走る道の先から眩い光が差し込んでいた。路地裏から抜け出たとき、辺りをつつむ雰囲気が今までのものとは変わった。

この場所はさつきまでの風景とは一変していた。レンガを用いた建物はなく、木材で建てられた家が並ぶ。その右端には倉庫があり、ずいぶん使われていないようだつた。倉庫の横には3階分の高さをもつ鉄の塔があつて、予算が足らなかつたのか骨がむき出しになつていた。塔の頂上には広めのスペースがあり、見張り台のような造りである。こんな場所に、いつたい何のために建てられたのか……。辺りは物音もなく静かで、遠くからの音だけが聞こえる。全く人気のない場所。私が見てきたアルアタシスとは、正反対の雰囲気だつた。

少年は鉄の塔を登つていく。バロンも少年に続いて登つていく。私も2人を追いかけるため、鉄の梯子に手をかけた。

少年は塔の上を目標しているようだが、そこからの逃げ道はない。あとは追い詰めていけばいいだけ ようやく終わりが見えてきた。私は息切れした弱っている体に鞭を打つて、梯子を上り始めた。

一步一歩足場を確認しながら登つていぐ。一定のリズムで鉄の音が響き渡る。

この塔が位置する場所はアルアタシスで一番高い位置にあるらしく、上つていくと街の風景が視界いっぱいに広がつていった。オレンジ色の屋根で埋め尽くされた世界。屋根と屋根の隙間が道に当たるところだろう。隙間の大きいところには、色とりどりの旗が掛つていて、パレードのような賑やかさを演出していた。景色の中心には噴水があり、そこから全方位に向かつて建物が並んでいる。この街は噴水のある広場を中心に、円を描いたような造りをしているようだ。

私は周りを見渡しながら、塔の頂上を目標した。

梯子を登り切ると、少年とバロンが対峙していた。少年は柵にもたれるようにして、バロンをにらんでいる。

「まさかこんなところまで追つてくるなんて思わなかつたよ。おじちゃんたちすごいね。これつてそんなに大事なものが入つているわけ？」

「すまないが、返してくれ。何が入つているかわからないが、アリスが持つてきたたつた一つの荷物なんだ」

「そんなこと言われて返すわけないじゃん、バーカ」

頭の中で血が沸騰してきた。バロンは冷静な姿勢を崩していなが、私はそんな風に落ち着いてはいられなかつた。

「頭にくるわね。人のものを盗つておいて」

「何言つてるんだよ。これは落ちたもの。それをオレが拾つたら、今はオレのものだ」

ますます怒りが込み上げてくる。

「いいわ。それなら力づくで取り返すから!」

少年に向って一步を踏み出した。少年はただニタニタと笑っているだけ……。逃げるつもりはないみたい。

それなら容赦なく捕まえてやるわ!

私は少年へと更に近づいた。

少年をじっくり観察しながら、一步ずつ足を踏み出していく。ちょうど半分の位置に来たとき、少年は頭の上へ両手を上げた。

いつたい何のまね?

疑問に思いながらも、私は一步を踏み出した。

上げられた手の片方には、鉄の棒が握られている。でも、襲つてくる気配は感じられない。諦めてしまったといつわけではなさそうだが……いつたい、どうするつもりだろう?

不安が私の後ろを、バロンがピッタリついてくる。もじもじの時、すぐに助けられるようにだらう。

慎重に一步ずつ近づいていく。

もう少し、もう少し……。

私と少年の距離は着実に縮まっている。なのに、少年は笑みを浮かべた。

なにがおかしいの? と私が不安に思つた次の瞬間、少年は大きく体を反つて飛び上つた。宙に浮いた少年は、後ろに両手がついているかの如く見事柵の上に着地を決めた。

私は一瞬ヒヤッとした。

いつたい何を考えているの？

一步間違えば落ちて死んでいたかもしれないのに。

まさか？

私の中で嫌な予感が芽生えた。

「ちょっと、何するつもりなの？」

「何すると思う？」

私はその場に立ち止まつた。もしも次の一步を踏み出したら……。

「とりあえずその柵から降りて。もし落ちでもしたら……」

「落ちたら……死んじゃうね」

なんで笑っているのかわからない。

「いいから、降りて」

「降りたら許してくれる？」

自分の命で交渉に出てくるなんて、まさかの行動だった。感じなかつたら少年を殺すことになる。私は最悪の事態を避けるため、少年に声をかけた。

「わ、わかったから。だから、そこから降りなさい」

クスリと少年は笑つた。

「あんまり信用できないな」

「本当に何もしないから、だから早く降りなさい」

焦つているからだろうか、私は声を大きくして少年に訴えていた。

「うーん。まあ、信じてやるか……」

そういうつて少年は柵の上から飛び降りた。

「……え！」

私の顔が青ざめていく。

確かに少年を柵の上から降りてくれた。しかし、それは安全な足場のある方ではなく、足場のない地面へ落ちる方だった。

えうじて……。

スローモーションで落ちていく少年の姿を、私はただ茫然と見送る事しかできなかつた。柵の向こう側を通り過ぎていく少年の顔はなぜか笑つていた。

思考が止まる。そして、罪悪感が襲いかかってきた。

少年の姿が見えなくなつて、やつと私は現実に向かい合つた。

動きだす時間。

私はすぐさま柵へと駆け寄つた。

柵から身を乗り出すよつにして、地面を見つめる。……しかし、そこに少年の姿はない。

どうこいつたの？

すると遠くから声が聞こえてきた。

「ばーか」

顔を上げて声がする方を見ると、少年は一本のロープにぶら下がっていた。この鉄塔から街の外れに向かつて伸びているロープ。そのロープに鉄の棒を潜らせて、両手で鉄の棒を握っている少年。少年はそのロープを滑るよつにして、街の外れへと向かつていた。その状況を目にして、私は安心した。

少年は死んでいなかつた……。

ホッとする私。しかし、そんな自分を煮えたぎつた怒りが、瞬時に包みこんでいった。

「こ、この……クソガキ！」

今にも柵から飛び出しそうな私をバロンが後ろから押さえゐる。

「アリス、落ち着くんだ！」

落ち着けですつて？

落ち着いてなんて……いられないわよ！

身体を押さえられているにも関わらず、私は必死に彼を追いかけようとした。

しばらくもがいた後、私の怒りは少しだけ収まった。

「アリス、大丈夫かい？」

バロンは心配そうな顔を覗かせている。

「うん……少し落ち着いたかも」

私は意氣消沈したような声を上げた。

バロンは、私の顔をマジマジに眺めている。そして……少し笑みを見せた後で、真剣な顔つきをし、声をかけてきた。

「さて アリス。これからどうする？」

「どうするつて？」

「さつきの少年を追いかけるかどうか、ということだ」

「追いかけるつて言つても、アイツはあんな遠くにいるんだよ。今から追いかけても見失っちゃうだけよ……」

「確かに、走つて追いかけたら見失つてしまつだろ？ それならば、あの少年と同じように建物の上を歩いてゆけばいい」

「どうやって？」

「空を 飛ぶのさ」

そう言われて、私はバロンが魔法を使える事を思い出した。確かに空を飛べば、アイツを捕まえる事が出来る。でも、人であふれかえっている街の中で魔法を使つていいものだらうか？ 昨日ヤンクロックが言つていたように、騒ぎになるのではないだらうか？

私は考へている事を口に出した。

「ダメよ。空なんて飛んだり、街がパニックになるわ。そうなつたらこの街にもう来る事が出来なくなつちゃう。情報を集める事が出来なくなるのよ。それをわかつて言つている？」

「ああ、もちろんだとも。騒ぎになることは予想できるからね。それでも、アリスにとつて唯一の荷物であるあのバッグを、取り戻すことの方が大切だと考へたのだ。だから、空を飛ぶことに迷いはない」

バロンの真剣な言葉に圧倒されてしまった。私は『空を飛ぶくら

いなら荷物はどうなつてもいい』と言おうとしたが、その言葉は口から出ることはなかつた。

私のバッグ、それはメイフォルトからの贈り物。私が一番……大切にしていた物。そんなことバロンは知らないけれど、それでも取り戻してくれると言つてくれた。ここまで言つてくれるバロンに対して私も強く決心した。“絶対取り戻す”つて。

バロンと私を光が包む。2つの光は少年の移動した場所まで、真っ直線に飛んでいった。

どこにいる？

空から少年を探す。建物内に逃げ込んでいない限りは、きっと見つかるはず。

「いたぞ！」

バロンは持つていてるステッキである方向を指し示した。そこには先ほどの少年がいた。古びた木造の家が立ち並ぶ中に、ポツカリ空いた空地のような広場。そこで少年は、バッグの中身を詮索していった。その周囲には10人以上の子供たちもいる。私とバロンはその広場へと降り立つた。

広場で群がっている子供たち。

そこから少し離れた所に私たちは降り立つた。

「私の荷物、返しなさい！」

大きな声が広場に広がつた。子供たちが一斉に、こっちへと振り向く。みんなポカーンとした表情を浮かべて、私たちのことを見て

いた。

「しつこい奴らだな……」

先ほどの少年が群れの中から出てきた。

「それは私の物なの。それを盗むなんて……最低よ……」

私は少年に向かつて、怒りを露にした。

「盗んだんじゃない！ 拾つたんだって言つただろうが！」

「私にぶつかって、落とした荷物を拾つたんじゃない！ それって盗んだって言うのよ。そんなことはいいから……早く返して！」

私の言葉に、少年の後ろにいる子供たちがざわざわと騒ぎ始めた。

「盗んだものなの？」

「お兄ちゃん……悪いことしてるの？」

子供たちは少年を心配している。

「ち、違うぞ！ お兄ちゃんがちゃんと働いてもらってきた物なんだぞ」

少年はやさしい口調で子供たちをなだめる。

「違わないわよ！ それ……私の物なんだもん」

私は容赦なく正論をぶつけた。騒ぐ子供たちは少年の言葉を聞き入れず、不安げな表情を浮かべていた。

心配する子供たちを何とかしようとする少年。その姿は、先ほどまで偉そうな態度をとつていた者とは別人だった。私たちは、その姿を黙つて見守っていた。

「お兄ちゃん。本当の事を言つてよ」

一人の少女が問いかける。

「これは……だな」

少年は言葉を詰まらせた。

「お兄ちゃんが悪い」とするととは思えない！ 何かの間違い……なんだよね？」

男の子が訊ねてくる。しかし、少年は黙つたままだった。

その光景を見ている内に、抱えていた怒りが消えていた。そして、

なんだか切ない気持ちが胸の奥から込み上げてきた。子供たちを支えるため悪事を働いた少年があまりにも哀れで、かわいそうだと思つてしまつた。子供たちもそんな少年を慕つていて、それが何とも言えない気持ちにさせた。

少年を慕う一人の男の子が、杖を突きながら少年の元へと歩んでいく。

.....。

「えつ」

私は目の前の光景でおかしな部分がある事に気づいた。少年に歩み寄る男の子。その手には杖を持つていて。杖をうまく使いながら、右足を出して.....一步進み、また右足を出して.....一步進む。使われていない左足。そう、左足を使つていない。いや.....左足が無い。

他の子供を見てみる。ある少女は、右腕がない。ある少女は左手がない。ある少年は.....。子供たちの身体は、人としてどこか欠けていた。

私は目を疑つた。

「どうこいつ.....」と?

疑問がそのまま口から飛び出した。

「ねえ.....。あなた達、その身体.....どうしたの?」

返事に困つていた少年が、パツとこっちを振り向いた。

「そんなことどうだつていいだろ! おまえには関係ない!」

少年はすゞい形相でこっちを睨んだ。

「.....ごめんなさい」

なんとなく悪い事をしたような気分になつた。

「お姉さん」

俯いている私に一人の少女が声をかけた。

「どうして私たちがこんな身体をしているのか……知りたいんですか?」

あどけない顔で問いかけてくる。私はゆっくり頷いた。

「アリッサ、余計な事は」

「私は生れつき右腕がないんです。他の子たちには、生れつきそういった身体の子もいれば、事故で失くした子もいます。それでみんな親に捨てられました。お兄ちゃんはそんな私たちを助けてくれたんです」

少年の言葉を遮つて、少女は話を続けた。

「私たちが生きているのはお兄ちゃんがいたから……。だから、お兄ちゃんが悪いことするとは思えないんです。本当の事を教えてくれませんか?」

無垢な瞳が、胸を締め付けた。

本当の事を言つていいのだろうか?

慕つているこの子を傷つけていいのだろうか?

私は返事をする事に困惑した。

黙つて立ちぬくしてみると、バロンが私の肩をポンと叩いた。そして、一歩前に出てこいつを向いた。

「バロン……」

バロンはやせしい顔を見せた後、少女の方へと顔を向けた。

「お嬢さん、その荷物はこの子の物なんだ」

少女の瞳が微かに揺れた。

「そここの少年が拾つたものなのだが、元はこの子のモノ。すまないが、返してはくれないかい?」

バロンはやせしくさせやいた。

少女は落ちていたバッグを拾い上げると、ゆっくりこじりあへ歩い

てきた。少女の歩みを誰も止めようとしなかった。

「はい、お姉ちゃん」

「あ、ありがとう……」

手渡された赤色のバッグ。私はそのバッグをただ見つめていた。少女はバッグを届けると、すぐさま元の場所へと帰らうとした。

「お嬢さん？」

バロンがそれを引きとめる。足を止めた少女が、こちへと振り返る。バロンは懐から財布を取り出して、数枚のお札を握りしめた。「落したものを届けてくれたお礼だ。感謝の気持ちとして受け取ってほしい」

バロンは、彼女の手に感謝の気持ちを乗せた。少女はきょとんとした顔をして、手に乗ったモノを握りしめていた。

私とバロンは茫然と立ちつくしている子供たちを残して、広場からゆっくりと立ち去った。子供たちからは見えない場所へ来ると、バロンが魔法を使った。

光に包まれていく身体。

2つの光は空へと舞い上がった。

「うわああ……」

後ろから声が聞こえてくる。振り向くと、子供たちが私たちを見て声を上げていた。

「ど……同情なんてしゃがつて

あの少年が口惜しそうに声を放つ。

「感謝の気持ち だ」

バロンは大きな声で、少年の言葉を遮った。

空中を歩く二つの光。その一つはまっすぐ前を向き、もう一つは下を向いていた。

私はさつきの出来事が頭から離れず、心に闇ヤマトがかかるような気持ちでいた。

私が荷物を取り返そうとしなければ、少年も子供たちも今まで通り平穀に暮らしていけた。だけど、私が荷物を取り返そうとした事で、少年への信頼は崩れ、子供たちには辛い思いをさせてしまった。この荷物をそのまま渡しておけば……。

「アリス、大丈夫かい？」

私は顔をあげた。

「……先ほどの事を考えていたのかい？」

私はうなずいた。

「そんな顔をしないでくれ。別に悪い事をしたわけではないだろ？」

今自分がどんな顔をしているのかなんて、わからない……。バルトンの言葉を聞く限りでは、おそらく悪さをした後の子供みたいな表情を浮かべていたのだろう。

「アリスは……やさしい女の子なんだね」

バルトンは微笑みながら、ささやいてきた。

「だがね……アリス。どんな理由があろうとも悪いことをしたのであれば、それはちゃんと言つてあげないといけない。彼が自然に存在する物を取つたのであれば、問題はなかつただろう。しかし、人間の世界では違う。人間は物に所有権をつける。所有者のモノを取つたとなれば、それは罪につながる。彼を思うのであれば、正しい事を言つてあげるべきではないのかい？」

「……うん。でも

「ん？」

「あの子供たちばかりうつなつちやうんだろ？」

「彼らなら大丈夫さ。どんな辛い事があつても、しつかり生きていける。今までそうやって生きてきたのだから。アリス、君は彼らに同情しているのかい？」

「……少し……だけ」

「それは間違つていいよ。彼らはそんなに弱い人間ではない。君は病気の友達に同情したかい？ それで旅を始めたのかい？」

「……ううん」

「そうだよね。確かに普通の人と比べれば、彼らは少し不自由なのかもしれない。だからといって、同情される程落ちぶれてもいい。彼らは彼らなりに強く生きている。それが幸せと呼べるものではないとしても、決して不幸と言い切れるようなものでもない。君の友達だって、そう思つているはずさ。……もし、君が彼らの事を考えるのであれば、この世界自体を変えてあげないとね」

バロンの言葉に私は深く頷いた。

「それでは、君の友達を助けるために次の場所へ行こう！」
「うん！」

彼らを思うのであれば、彼らを取り巻くこの世界を変える必要がある。

メイフォルトを助けたいのであれば、彼を苦しめるその病を治す必要がある。

私は気持ちを切り替えて、しつかり前を向いた。2つの光は力強く輝きを放ち、高く高く……大きな空へ上がつていった。

アルアタシスからユナシス王国を横切り、東の果てを目指して飛び。地上は広大な森に覆われていて、見渡す限り緑一色である。オーランスの森と呼ばれるこの場所には、古来より古の民が住むと語り継がれていて、神聖な場所として今も人の手に触れられることなく、昔から変わらぬ姿を保ち続けている。

私たちが目指すドワーフの森は、この森の中に存在する。ヤンクロツクの話では、森の北東部に他と比べ物にならない程大きなトウレの木があり、その周辺でドワーフは生活しているという。バロンから借りたコンパスを頼りに、2つの光は森を北東に進んでいた。

オーランスの森に入つて10分が経つた頃、森から突き出た大きな木がその姿を現した。異常なまでに成長したトウレの木。その姿は山を思わせる。一本の木がここまで大きくなるのに、いつたいどれだけの時間を費やしたのだろう。普通の木ですら数十年の樹齢があるのに、ここまでなると……千年？ いや、一千年？ いやいや、それ以上かも……。人の手に触れられなければ自然はここまで成長できる事を、世界最高の高齢樹は私たちに示していた。

森に降り立つた私たちは、この森が他の森とは全くの別物である事を、身をもつて感じた。

そこら中に生える草木は、その身に美しい色を添えて、可憐に命を咲かせている。赤、オレンジ、黄、青、白にピンクに紫色。命の輝きが、辺り一面を華々しく飾っていた。華やかな姿だけでは森が弱々しく見えてしまうため、身体を鍛え上げた大木たちがその力強いオーラで森にインパクトを与えていた。巨大な幹がひしめく中を、鳥のさえずりが響き渡り、澄んだ空気に和やかな色を添える。空を

覆う木の枝は、太陽の光を最小限に抑え、森の中にスポットライトを作りだしていた。すべてのモノが各々の役割を全うし、その結果私の目の前には一つの芸術が誕生している。それはどんな物でも敵う事のない、心を動かすものだった。

「アリス」

横にいるバロンが声をかけてくる。私は目だけをバロンに向けた。

「素敵な場所だな……ここは」

「……うん」

「どの生き物も生き生きとしていて、そこら中に命の息吹を感じる。楽園とは、こういう場所の事を言うのかもしれないね」

私は頷いて、返事をした。言葉を交わした後、私とバロンは目の前の光景にしばらく心を奪われていた。

日が傾き、森を闇が包みだした時、ようやく私たちは立ち止つていた足を前に動かした。道と呼べるモノがないため、通る事の出来る場所が全て道となる。大木の合間を縫つように、私たちは森の中を進んでいった。

「ここから少し坂になつてているようだ。アリス、身体は大丈夫かい？」

「うん、今のところは」

「そうか。なら、先を急ごう。あまり暗くなると、厄介だからな」私は足の裏でしつかり地面を掴んで、力強く一步を踏み出した。バロンの背中を追いかけて、もう20分が経つ。辺りは闇に包まれて、小さな生き物たちによるオーケストラが演奏を開始していた。「だいぶ暗くなってきたなあ」

「うん……。これ以上は無理かも……」

私の言葉に対して、バロンが鼻で笑つた。

「大丈夫だよ、アリス」

そういうと、右手に持つていたステッキを胸のあたりに持つてきて、何か言葉をつぶやいた。すると、ステッキについている宝玉が

小さな光を灯す。光は徐々に大きくなり、辺りを照らすランプとなつた。

「これなら大丈夫だろ?」

バロンが微笑みを浮かべて私にむかやく。

「うん!」

安心させてくれたバロンに、私も笑顔で答えた。

宝玉の光によつて再開された旅は、何本もの木々を通り過ぎて、ついにあのトウーレの木までたどり着いた。

「……」

ここまで歩いてきたが、ドワーフらしき者と会つ事はなかつた。ヤンクロックの話が嘘だとは考えにくいから、私たちが道を誤つたと思われる。一日中走り回つた体は体力の限界を迎へ、これ以上闇雲に探し回るのは出来なさそう……。私は途方に暮れて、トウーレの木にもたれながら地面に座り込んだ。

「見つからなかつたね……」

「ああ……。残念だが、今日はここで引き揚げるしかないようだな」バロンも諦めた顔を見せてゐる。じつやら今日の旅はここで終わりのようだ。

「アリス、立てるかい?」

「うーんと……。『めん、バロン。ちょっと手を貸してもらつてもいい?』

バロンが手を差し伸べて、私はゆっくり腰を起した。

「今日の続きは、また明日だ。さあ、家に戻ろ!」

バロンの体から光が溢れ出し、辺りが昼間のような明るさに包まれる。私の体も光を放ち、帰りの準備が整つた。

「行こうか」

バロンの掛け声と共に、私たちは空に向かつて上がつていいく。地上を離れ、森から抜け出そうとしたとき、宙へと舞い上がつていた身体が急に動きを止めた。

「バロン、どうしたの？」

「すまない、アリス。ちょっと氣にかかるモノを見つけて……。あそこで光っているモノはなんだろう？」

「バロンがある方向にステッキを向ける。そこには、暗い闇の中で小さく光っているモノが何個も集まっていた。

「本当……。あれって何なんだろう？」

「私もその光が何であるのか気になった。

「降りて調べてみるか」

「うん」

バロンの言葉に頷くと、2つの光は地上へと舞い降りていった。

光を放っていたモノを調べるべく、私たちは森を進む。近づいてゆくと、それが丸みを帯びたランプである事に気づいた。更に、そのランプの向こう側で誰かが動いている事もわかった。

「もしかして……」

その場所が何であるかの答えが、だんだん予想できてきた。

「ああ。おそらく、あの場所がドワーフ達の暮らしている所だろう」バロンがハツキリと答えを提示した。どうやら間違いないらしい。ついに目的の場所を見つけたようだ。

私とバロンは歩みを速めて、目的の場所へと駆けだした。

「おい、止まれ！」

闇から放たれた警告に足が止まる。

「お前ら、何者だ？」

鼻にかかったような声が、私たちに問いかけてくる。

「私はバロン。ここより遠く離れたリサルドという村からやってきた者だ。そういう君は誰なんだい？」

「俺かあ？ 俺はこの森に昔から住む者だ。それより、お前らは何しにこの森に来た？」

「私たちはドワーフに会いに来たの。どんな病でも治すことのできる薬草があるって聞いたから」

「あなた、まず名前を名乗りなさい」

「また別の声が問いかけてくる。今度は女の子のようだ。

「ごめんなさい。私はアリスと言います。ガリレオん王国のレアードールという街から來ました」

「ふうん」

「偉そうな口をきいてくる彼らに、私はちょっとムカついた。

「本当に薬草だけが目的か？ 他に何かあるんじゃないのか？」

「本當よ」

「人間の言う事なんて、信じられないな。人間はよく嘘をつくんだろ？ 色々と話は聞いてるぞ。むやみやたらと森を荒らして、自分たちの物にするつて。お前たちもそうじやないのか？」

「違うわよ！ 他の人がどうかなんて知らないけど……私たちは違う！」

「そんな怒ったように言われたら、ますます信じられないよ」

「ホント。あなた達がどういう人かなんてわからないしね」

森から聞こえてくる声は、私たちの事を疑つてやまない。それだけ人間の行いが酷いものなのだろうか……。

「君たちがそうやって信じないのは勝手だが、相手に姿を見せないで好き放題言つのは幾分失礼ではないのかい？」

バロンが口調を変えて、彼らに問う。

「フン！ お前らなんかに見せるほど、安い顔をしてないからな」

「そうか。なら、少し強引ではあるが、その顔を見させてもらりうとしよう！」

そういうと、バロンは声のする方に向かつて右手を振り上げた。

次の瞬間、ステッキに灯つていた光が宝玉を飛び出して、空中を飛んでゆく。ある距離まで飛ぶと、光の球はパツと弾けて覆つてい

た闇を吹き飛ばした。

「うわあああ

「キヤツ

照らし出された森の中、木陰から身体をちょこっと出した2人の子供が姿を現した。私の2分の1程しかない背丈、鮮やかな緑色をした髪、身を包む服には自然にある素材が使われていて、森の民と呼ぶには相応しい格好である。

姿を見られた子供たちは、怯えたような表情を浮かべた。そして、『チクショ』と声を上げると、逃げるよつにランプが集まる場所へと走り去つていった。

「それでは、私たちも行くとしようか」

バロンの声に導かれるよう、2つの足音は彼らの向かつた場所へと近づいて行つた。

森の中に忽然と姿を現した村。空からでは確認する事の出来なかつた自然と共に存している村。木の中に住居を作り、家の外 玄関となる場所にランプを吊り下げている。私たちがずっとランプと思っていたモノは、どうやらランプとは別のものらしい。どういった原理で光を出しているのかわからないが、その黄色がかつたオレンジ色の光は見ている私の心を優しく包み、落ち着かせてくれた。私たちが村に足を踏み入れた時、村の入口にはさつきの子供たちと同じような恰好をした人々が待ち構えていた。

「こんな時間に訪れてくる者がいようとは、非常に珍しいですね」

髪をモシャモシャと生やした老人が、こっちへ歩み寄つてくる。

「あなた方は、どういったご用件でこの村を訪れたのですかな？」

「私たちは、この村にあると聞く万病に効く薬草を求めてここにきました」

「そうでしたか。先ほどある村の子供が『あやしい2人がこっちに来ている』と言つていましたが、どうやら間違いのようですね。もしかして、子供たちから何かされましたか？」

「いえ。特に何かをされたわけでは……」

「ホツホツホ。すみませんね、いたずら好きな子供が多いものでして。客人にはよく迷惑をかけてしまうのですよ。概ね遊び相手が出来たと思って、からかっているのでしょうか。気分を害されたのであれば、私が代わって謝ります。ですので、子供たちの事は許してやつてください」

「そんな心配なさらなくて結構ですよ。少しじゃれ合つただけですから」

バロンは落ち着いて答えた。

「そうでしたか。そう受け取つてもらえたのであれば、私としては嬉しいです。それでは、話を戻しましょうか。えーと薬草についてでしたかな?」

「はい」

「う~む。少し……長い話になるので、よろしければ家の中で話しませんか?」

「あなたがそうおっしゃるなら……」

「私たちドーワーフの老人に連れられて、ある家の中へと招かれた。

大木の中に作られた家。少し小さめの部屋には、小さなテーブル、小さなイス、小さな食器棚に小さなベッドが置かれている。私たちの家をそのままミニチュア化したような部屋である。天井は私より少し高いくらいの高さで、バロンの頭が天井に少しふれている。

老人の案内により、私はイスに腰をかけた。

老人がキッチンに入つて飲み物を用意している間、私は狭い空間に違和感を覚えて、キヨロキヨロと辺りを見渡していた。

「どうされました?」

「あつ！ すみません」

「何か不思議なものでもありましたか?」

「そういうわけじや……」

私は天井から垂れさがつているランプに目を向けた。

「なるほど、そういう事ですか。珍しい木の実でしょ？」

「ええ」

「あれは、アダムの木から取れた果実なんですよ。他の植物に比べ、果実の表面が透けており、果実の中に強い生命力が秘められているため、その力がこうやって光となり、外に漏れているのです。不思議でしょ？」

「はい……」

「植物の中でも、これほどの光を放つモノはないですかね」

老人は目じりにしわを寄せて、微笑んだ。

「さて、話をしましょか。あなた方が求めている薬草とは、おそらくレストア草の事でしそうなあ。レストア草が咲かせる花の蜜には、万物すべてのモノを元に戻す力があると謂われていますからね。レストア草は、この地方にしか生息しない、またこの地方でもある場所でしか育たないという非常に珍しい植物です。更に、花を咲かせるのは年に一本のみという不思議な生態を持つています。探すのは、非常に困難でしょなあ」

「そうなんですか……。でも、私たちが探しているモノは、その草に間違いないと思います」

「……そうですか。ならば、教えるしかありませんね」

そういうてドワーフの老人は、薬草が生息する場所について詳しく説明してくれた。

「本当に探しに行かれるのですか？」

「はい。その草を求めている人がいるので……」

「別に止めはしませんが、探す時は十分注意してくださいね。最近、ヒュドラーがうるさいしているという噂ですから」

「ヒュドラー？」

「ええ。無数の頭を持つ大蛇の化け物ですよ」

老人は表情を曇らせた。

「……アリス。今回の旅は、少し危険すぎるかもしない。止めた方が良いかもしけん」

「でも……」

「普通に探すことですら困難であるのに、その近くには危険な生き物までいる。考えを改めた方が良いのではないか？」

「えつ……」

「いつでも私の味方であつたバロンが、初めて私を否定した。今までそういう事がなかつたからだろうか、私は驚きのあまり一瞬思考が止まつてしまつた。

「君が友を想う気持ちは、よくわかるが……今回だけは考え方直してほしい」

その言葉に、私は何も反応することができなかつた。

「……さて、夜もだいぶ更けてきたようですね」

家の外に目を向けて、髪を触りながら老人がつぶやく。

「今日はどうなされますかな？ 泊つていかれますかな？」

「ええ……。そうして頂けるのであれば、お言葉に甘えて厄介になろうかと」

「わかりました。それでは、今から用意しますので、しばらくここでお待ちください」

そういうて老人は外へと出でていつた。2人だけになつてしまつた家の中で、私とバロンは一言も声を発さず、ただ俯いて老人の帰りを待つっていた。

しばらくして、戻ってきた老人は私たちをある宿屋に案内してくれた。宿の中は客人を招くためだけに作られているため、先ほどの家よりも広々とした空間があつた。

私は宿の一室に入ると、そのまま崩れるようにベッドへと倒れこんだ。疲れていたという肉体的理由もあるが……それ以上に、バロンから今回の旅をやめるよう言われた事で私のやる気が失われてしまつたという精神的理由の方が大きかった。

バロンなりじこな無茶にも付か合つてくれると思つてたの……

ベッドを転がりながら、消化しきれないと気持ちを振り回した。

「……アリス」

隣のベッドに腰をおろしたバロンが声をかけてくる。

「君の気持ちはわかる。だけれども、危険と分かり切つている事を簡単に了承するわけにはいかないのだよ。わかつてくれるかい？」

「……うん」

「君には辛い思いをやせらる事になると思うが、今回だけは……」

「……わかつた」

「すまない……」

そういうとバロンは、部屋に置いてあるアダムの實に布をかぶせて、明かりを落とした。

部屋を静かな闇が包み、私はゆっくり目を閉じた。

煌びやかに彩られた街の風景。その中を私は歩いている。周囲には、光を灯した街灯が立ち並び、夜の街を照らしていた。

少し歩いた先に、一軒のお店が見えてきた。青、赤、黄色、オレンジのランプに彩られた、とても明るいお店である。私は歩みを進めると、迷うことなく、そのお店のドアに手をかけた。

チリン、チリン

ドアの向こうには、外よりももっと鮮やかな世界が広がっていた。お店に設置された4つの棚には、宝玉を使用して作られた商品が並び、どの商品からも暖かい光が漏れている。商品を横田に足を進めると、商品たちが少しづつ表情を変えて私の方へと光を飛ばしてきた。その光に導かれるよう、私は膝を曲げて商品をじっくり観察した。

「そろそろ来るだろ」と思つていたよ

聞こえてきた声に体が反応する。私は頭を上げて、声の主の方へ顔を向けた。

「やあ」

手を上げて、挨拶していく一人の男性。長身の体に筋肉が程良くついている。

「久しぶりだな、マルス」

私は男性に返事を返した。

マルス 本名マルス・ファーレット。この店の主人にして、店内に置いてある商品の創作者である。

「君から頼まれていたモノ、もう出来てるよ」

マルスはカウンターの下へ身を屈めると、白い布に覆われたモノを取り出した。

「ほら」

私はマルスの元へ歩み寄り、彼の手に持っているモノを受け取った。

「商品が君の依頼と合っているか、一応確認してくれ」

マルスの言葉に従い、白い布を取り外していく。布を取り除くと、そこから一本のステッキが顔を出した。

「どうだ？」

「うむ。間違いない、私が頼んでいたモノだ」

青い宝玉が、先端に取り付けられたステッキ。私の格好に似合うよう、余計な細工は施されていない。全体を白でコーディングされていて、清楚な感じを思わせる。

「久しぶりにやり甲斐のある仕事だつたよ」

笑いながら、マルスは口を開いた。

「ありがとう、マルス」

「どういたしまして……といつても、こつちは商売でやっているんだ。礼には及ばないよ」

「そうか。あ、代金がまだだつたな」

私は慌てて懐に手を伸ばした。

「いや、いいよ。今回の依頼は、俺がやつてきた仕事の中で最も楽しかった仕事だつた。だから、それは君への饗別つて事でプレゼントするよ」

「いいのか？」

「ああ」

そういうって、マルスは満足げな顔を見せた。

「これで君は魔法を使う事が出来る。やつと探し物を見つけに行く準備が整つた、という事だな」

「ああ。やつと、すべてが揃つた」

私の顔に強い意志が宿る。

私は……いつたい何を探しに行くんだ？

疑問に答える者はなく、もう一人の私とマルスは話を進めた。
「俺に出来る事は何もないが、君が無事旅を成し遂げる事を心から
祈っているよ」

「何から何まで世話になつて……本当にありがとうございます。危険な旅にな
るが、戻ってきたら絶対君に会いに来るよ」
「そういうて私はマルスに別れを告げた。

ちょっと待ってくれ。

私は何を探しに行くんだ。答えてくれ！

もう一人の私は問い合わせる言葉を無視して、そのまま店を立ち去
つた。

暗闇の中、バロンは田を覚ました。

彼は起きあがろうとはせず、天井を眺めたまま何かを考えている。

私の探しものとは？

彼が昔の記憶を夢の中で見るのは、これが初めての事ではない。
以前、リサルド村の近くで、彼に関するモノが見つかった事がある。
そこは彼が倒れていた場所だった。見つかったのは、一枚のメモ。
メモにはこう記されていた

あなたの依頼、引き受けました。

しばらく時間がかかると思いますので、1ヶ月後にまたお越し下さい。

「芸品の店・マルス・ファーレット

住所：レアードル3番街1-14

そのメモを見つけた日、彼はマルス・ファーレットといつお店を訪れた夢を見た。夢はお店を訪れたところで終わり、その後どうなったのかはわかつていなかつた。今日見た夢は、その続きに当たる。

「ハア……」

バロンは大きく息を吐いた。

手がかりとなる物が夢の中で見つかつた。しかし、それはハッキリとしないあやふやなモノ。何か胸につつかえたような、そんな気分だつた。

バロンは夢の中でもう一人の自分が、危険を顧みず旅に出ようとしている事についても、何とも言えない気持ちにさせられていた。ついさつきアリスの事を否定しておいて、自分はその否定した行為を実行していたのだから。

バロンはアリスのベッドの方に身体を転がした。

「アリス」

暗闇の中で、彼女を観察する。

「アリ……ス？」

彼は変な声を上げた。

ベッドに寝ているはずの、女の子。その姿がビックリも見当たらない。

その事に気づいたバロンは、布団を蹴り飛ばしてベッドから飛び起きた。

アリスのベッドに近づいて確認する。しかし、彼女の姿はどこにもない。

バロンは焦りながらも辺りを確認するため、アダムの実にかかる布を取り払おうとした。しかし、布がかぶさっていた場所からアダムの実が消えていた。

「アリス、どこに行つたんだ？」

バロンは一瞬疑問に思つたが、すぐに彼女がどこへ行つたのか見当がついた。

「まさか……」

バッグの中を調べる。入れていたはずのコンパスがない。予想が確信へと変わつていく。

バロンは血相を変えて、暗い部屋を飛び出した。

彼が向かつた先は村長の家。たどり着くと、バロンは声を荒げながらドアを叩いた。

「夜分にすまない。緊急の用事が起きた。すまないが、ここを開けてくれないか？」

ノックするドアの向こうから、髭を生やしたドワーフの老人が現れた。

「どうなさいました？」

「私の連れが、突然消えてしまった。おそらく、薬草を探しに向かつたのだと思つ」

「なんですよー。こんな夜更けに……」

「あまり話をしている時間はない！ すまないが、薬草がある場所の方角を教えてくれないか？」

「ええ……。わかりました」

そういうと、老人はとある方向を指さした。

「今の時間帯は、ヒュドラが活発に動き出す時間でもありますので、
どうかお気を付けください」

「ありがとう」

手短にお礼をいようと、バロンは老人が教えてくれた方向に向って
走り出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9874c/>

耳をすませば～青い鳥が運んだ想い～

2010年10月10日00時28分発行